
武器と魔法と技術と知識は使いよう

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武器と魔法と技術と知識は使いよう

【Nコード】

N1831U

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

俺は死んだ、子供の神の悪戯によって。んでもってよくある転生をさせてくれるらしい。くじ引きで決める？んな、選べないのか！物騒なものや超子供向けのアニメがある中俺が引いたのは………
………ゼロの使い魔、キュルケと幼馴染になり、とりあえず頑張る物語。

一部のアニメ、ゲームなどから、魔法として、技を転載させていた
だいています。

pvアクセス40万突破。読んでくれた皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

よくある、てんせい！（前書き）

多分はじめてまじのかたが多いと思います。というわけでよろしく
お願いします。

よくある、てんせい！

「こちら井口小隊、敵部隊発見。交戦を開始する」

『了解、近くの笹淵小隊を送る』

「了解、全員かまえ、撃てえええええ」

ズガガガガガガ

俺達は今、サバゲー（ものすごい人数のため物凄くリアル）をやっている。現在敵を発見し、交戦中だ。俺は後になって思う。この時周囲をすっかり確認していればあんな惨事は起きなかつたであろうと・・・

「井口、車が突っ込んでくるぞ！」

「かわせ！」

俺達がサバゲーをやっているところに車が突っ込んできたのだ。俺は腰を抜かして動けなくなっている井口の腕を？むと、ボール投げのように、ブン投げた。直後・・・俺の意識は途絶えた。

「ここは・・・・・・？」

俺は綺麗な泉の横で倒れていた。

「ここは神界じゃよ」

俺のすぐ横にひげを蓄えた爺さんが現れる。

「俺は死んだんだな？」

「ああ、こやつが悪戯でな」

爺さんは子供を指さす。

「あっそ、んでよくあるパターンのお詫びにどこかの世界へ転生させてやるってやつだな」

「察しがよいのう。まあそんな所じゃ。ほれ、このくじを引け」

「？」

「この中からお主が引いたのが転生先じゃ」

「なにがある？」

「とある科学の超電磁砲&禁書目録・灼眼のシャナ・緋弾のアリア・バカとテストの召喚獣・学園黙示録・ナルト・ブリーチ・ワンピース・アンパンマン・ゼロの使い魔・全ガンダムシリーズ・マクロスf・空のおとしもの・ストラックウィッチーズ・遊戯王・ゲド戦記・トランスフォーマー・化物語・日常・けいおん！・デュラララ！！・涼宮ハルヒの憂鬱・俺の妹がこんなに可愛いわけがない・ヒカルの碁・電波彼女と青春男・天元突破グレンラガン・喰霊―零―・コードギアス反逆のルルーシュ・生徒会役員共・生徒会の一存・ハヤテのごとく・神のみぞ知るセカイ・荒川サンダーブリッチ・ジパング・ソウルイーター・おとぎストーリー 天使のしっぽ・アイシールド21・ギャラクシーエンジェるーん・スクールランブル・ひまわりっ！・武装錬金・ドラゴノーツ -ザ、レゾナンス-らき すた・あかね色に染まる坂・鉄のラインバレル・ケメコデラックス！・スケアクロウマン・絶対可憐チルドレン・二十面相の娘・ヒヤッコ・川の光・キデイ、ガーランド・君に届け・クイーンズブレイド・ジユエルペット・ドラゴンボール改・ファイト一発！充電ちゃん！！・FAIRY TAIL・WHITE ALBUM・まりあ†ほりっく・聖痕のクェイサー・ぬらりひよんの孫・ルパン三世・撲殺天使ドクロちゃん、などなどその他100じゃな」

「多いな・・・」

「それだけわしの力は強いのじゃよ」

「あっそ」

「はよう引くがよい」

俺は神の言われたとおりにくじを引く。出てきたのは・・・

「「ゼロの使い魔」」

ゼロの使い魔が出た。

「ゼロの使い魔・・・ふむチートはどうするのじゃ？」

チート能力・・・ならば徹底的チートに・・・

「髪の色とかは変えないで。魔法は最強レベルに。ゲルマニア出身の貴族。こつちでの知識は忘れないように。それと、俺の知りたかったことを教えてくれる本を4歳になったら転送してくれ。それと・・・少しだけ天才児補正」

「注文が多いのう。まあ良いじゃろうて。ならば行ってくるがよいぞ。相原君よ」

「ああ、行ってくる」

「それともう一つじゃ、原作破壊しても構わんぞ」

「そうか。じゃあな」

「たのしんでくるのじゃぞーーーーー」

俺は足元が消え、まっさかさまに落ちて行った。

よくある、てんせい！（後書き）

感想等をお願いします。

俺の名前はマクシミリアン・フォン・ケンプファルトだそうです。(前書き)

まだまだ学校に通いませんよ。

俺の名前はマクシミリアン・フォン・ケンプファルトだそうです。

俺は気付くと赤ん坊になっていた。

「静かでおとなしい子ですね。ケンプフェルトどの」

「ええ、おとなしすぎて困りますよ。これでも男の子かっくらいに」

えーと、この金髪の人がお父さんってわけですか・・・んでこっちの赤髪の方は？

「ははははは」

「ところでツエルプストーどの」

キュルケのお父さんでしたか・・・

「なんだい」

「今度そつちでもお子さんが生まれるそうじゃないか」

「ええ、お耳が早いことで」

「女の子だったら、どうですかね」

「同じことを考えていたところです、お互い辺境伯なんだ、いいか
もしませんかね」

「「まあ、お互い考えておくという形で」」

こつちが赤ん坊の時から縁談なんてするかよ・・・

「あなた、まだこの子は赤子なのですよ」

「「だから考えておくだけ」」

「まったく、マクシミリアン、貴方のお父様は既に結婚相手を決める気ですよ」

俺の名前は『マクシミリアン』ですか、宇宙に移民するために移民星を探す艦隊の艦長みたいな名前ですね・・・

うつ、赤ん坊のせいか眠気が・・・

俺は三歳になっていた。

今日、初めてキュルケに会うらしい。ていうか、お尻が痛い。三時間ぐらい馬車に乗ってるんだけど道をしっかり舗装してないのか物凄く揺れる。

「そろそろ着くぞマックス、しっかり挨拶しろよ」

「はい、お父様」

「いい子だ」

「コンラート様、到着です」

「そうか、降りるぞマックス」

「はい」

俺はキュルケの実家に着いた。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

いつまで少年期やるの・・・

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

赤髪のおじさんに連れられて俺と同じくらいの女の子が迎えに出てくる。きつとあの子がキュルケなのだろう、とまあそれはよしとして……

「マクシミリアン・フォン・ケンプファルトです。小さき頃にお会いした以来となりますが今晚はよろしくお願ひします」
しっかりとあいさつはしておきましょう。

「おや、凄くしっかりした挨拶をしますね、うちのキュルケはまだそんなにしっかりしていないのですよ」

「ははは、そんなことは結局できれば同じことだよ」
「そうだね、ははははは」

キュルケはツエルプストー辺境伯の後ろから顔を出しているだけで、堂々としていない。学校で大胆なあれは最初からじゃないのか……
……なら……

「一緒にあそぼ」

キュルケに手を差し出した。するとキュルケは、え？という顔をしたらあと、差し出した俺の手に、自分の手を向けてきた。そして、俺の手を掴みながら、笑顔で頷く。

「父上、キュルケと遊んで参ります」

俺は一応、父上に言っておく。そんなことあつてほしくないが、ツエルプストー辺境伯と喋っていて、こつちがいなくなったことに気付かない。とかがありそうだからだ。キュルケのほうを見ると、キュルケも、自分の父親に遊びに行くと、通達していた。この後、キュルケと俺は、日が暮れるまで、追いかけてこや、地面に寝転んだりして遊んだ。

俺達が屋敷の中に入ると、父上達が、既にお酒を飲みはじめていた。料理も準備されている最中だったので、そろそろ夕ご飯の時間かなと考えていたら、父上達が夕ご飯だぞ、と、手招きをしてきた。

夕ご飯はキュルケと並んで食べた。喋りながら食べていると、キュルケが急に倒れかかってきた。熱でもたかと思ひ、焦って様子を見ると、ただ寝ているだけだった。走り回ったのだから当然か・・・と支えながらキュルケを見てみると、父上達がわらいだした。

「どうしましたか？」

尋ねても笑っているだけで進展がない。なんで笑っているかはいいとしても、キュルケをどうにかしないと、と思ひ、キュルケの部屋は何処かと聞くとさらに笑う。怒気を混ぜながら再度聞くと、メイドが呼ばれ、キュルケを部屋に連れて行った。この日以来、キュルケと俺は、お互いの家に長期間滞在するようになった。

ついでに、この夜はキュルケと一緒に寝た。精神年齢は大人でも、身体は子供である。みんなが、期待するような事は何一つなかった。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

ポイント、感想をお願いします。

魔法の適性検査を行おう。しかし神のチートによって会場は破壊された。ケン

さてさて俺は四歳になりました。んで、今日が誕生日です。にしても……これまでそう思ってたけど、貴族って誕生日だけでこんなに金使っているのか？と考えるとまあうぐらうぐらい凄い光景が広がっている。山のようなケーキ、金粉の載ったスープ。とか色々、ていうか、料理になんでもかんでも金粉載せれば良いってわけじゃないだろうに……

「マックス、誕生日プレゼントだ」

「ありがとうございます父上」

「だいたい今もらった誕生日プレゼントが複数っておかしいだろ、しかも半分が杖、残りの半分が本だぞ……本はあってもいいかも知れんが……杖はいらなくてしょ……とまあもらったプレゼントをあさっていたら白い本が出てきた。他の本と表紙の色が違うのでめくってみると白紙だった。

「父上、これは？」

「ん？なんだ？こんなもの買った？気に入らないなら回収しとくがどうする？」

「どうするか……そう言えば神に四歳になったら知りたいことを知れる本をよこせて言っただけ？」

「いえ、頂いておきます」

「それとだなマックス」

「なんですか」

「お前の魔法の学習を始めようと思っ」

「分かりました、して、師範は？」

「落ちつけ、入れ」

父上が扉に向かって声をかけると扉が開き、一人の男が入ってくる。髪は金色、背丈は190ぐらい、やせている感じ、若い、まだ24ぐらいかな……手に持つ杖は苔の生えた長い杖。^{スタッフ}

「お初にお目にかかりますマックス様、今日より魔法の学習を担当させていただきますアロンです」

ちよつと待て・・・今こいつの言った言葉はそのまま受け取るとおかしくなるぞ・・・一つ目、『今日より』というところ。二つ目、

『魔法の学習を担当』というところ

「アロンは魔法の担当だ。普通の勉強はクラリスが担当してくれる」

クラリスはうちのメイド長だったはずだ。

「さ、マックス、アロンに魔法を習って来い」

マジで今日からですか・・・

ということと現在庭に出してきました。アロンに自己紹介をしてもらったところ、虚無を除く系統全てが使えて、火がトライアングル、風がライン、残りの二つ、水と土がドットだそうです・・・

「杖とチャツチャと契約しちゃってください。その後でないと魔法は教えることができませんので」

という感じであり教えるのは上手くなさそうです。

杖は、父上から誕生日プレゼントとして貰った中の一つで、作られたばかりと思われる短い杖ワンドを選び、現在契約中です。

杖は、これから体の一部と同等に扱うのだから・・・

(杖よ、これから俺とともに生きる、楽しみや、困難、さまざまなことを共に過ごそう)

手に持つ杖と感覚がつながった。さっきよりも杖が手にしっかりあっている気がする。これが契約終了の証かな？と思いきやアロンのほうを向くと、ぎょつとした顔をして、口がパクパクしていた。

「も、もう、契約終了ですか・・・」

「多分ですけど」

「たった数分で終わるとは・・・今日は魔法自体は教えないつもりだったのですが。まあいいでしょう。コモンマジックのライトから始めましょう」

コモンマジック、どの系統にも含まれない簡単な魔法、そのため全魔法の中で最も最初に学ぶ魔法である。

「手本を見せますからね・・・」

アーロンが『ライト』というのと同時にスタッフの先端に光が付く小さな光る球体が現れたという方が正しいか？

「ではマックス様もやってみてください」

「はい・・・」

アーロンが見せた数十倍は明るい球体が、杖の先端部分で光る。その明りは、影を作らないほど明るかった。

「すごいですね・・・」

しばらくすると光は弱まっていき、アーロンのライトと同じくらいの明るさになっていく。

「・・・それを消すことはできますか？」

「やってみます」

心のなかで消えろと念じるとライトは効力を失い消える。

「すぐにできませんね・・・それを素早くできるように、それと明るさを自由にコントロールできるようになれば完成です。まあそれは今度追求することにしましょう。適性を調べてみましょう」

「適正ですか？」

「ええ、各系統の簡易魔術を使えるかどうかを調べるんです。当然虚無は除きますよ」

ちよっとしたジョークを混ぜることでこちらの緊張をほどいてくる。こういうとき、テストのときはこういった簡単な気遣いが嬉しかったりする。

「最初は水です。手本を見せますから真似してください・・・」

アーロンの前に一メートルほどの水の球体ができる。

「ではどうぞ」

自分の前に水の球体ができるイメージをしながら唱え、発動させる。

「コンデンセーション」

十メートルくらいの水の球体がしばらくの間作られていたが、形が崩れ始め、地面に落下する。

「凄いですね、水の適性が物凄いですよ」

「ありがとうございます」

「では次に……………」

この後他の属性の適性も調べ、全てにおいて凄く適正だったらしい。自分でも驚いたのが火だった。コントロールにミスった、というのもあったが地面を大きくえぐった。アーンンによると、全系統において、トライアングルクラスの魔法の威力だったらしい。

とある一室

「コンラート様、マクシミリアン様の魔法はとんでもない力を持っています」

その部屋にはコンラートとアーンンが二人でいた。

「どれくらいの威力だ？」

「あのままなら簡単にスクウェアクラスに到達するかと」

スクウェアは超一流の使い手と呼ばれる。それだけスクウェアクラスの使い手は少ないのだ。

「……………そうか、他の者には口外するなよ」

「了解しました」

「ところでマックスは今どこで何をやっている？」

「書斎でクラリス殿に勉強をさせられています」

「見に行くかな」

マックスのことが結構気になるコンラートであった。

少年よ大志を抱けb yクラーク・・・・・・・・少年は書齋の中で夢

だいが更新が遅れます。

マクシミリアン、通称マックスです。五歳になった僕ですがいつの間にか口調が変わってしまったようです。実は言つと今の私はひきこもりです。毎日毎日書齋にこもりっぱなしです。正確にはこもりっぱなしというより生活をそこで行っています。書齋は母屋とは違う建物で、普段誰もいませんが、書物がジャンルごとに別れて整理されていて、合計すれば数万冊保管されています。ついでに僕は全ての本を読み終えており、神よりもらった天才児補正の力により本の内容を完璧に暗記しております。というより神が私に行った天才児補正がとある科学の物凄く発展した都市に流れ着き、一万三千冊の魔道書を暗記しているシスターさんと同じ力で、全ての者を暗記する力だったからです。『完全記憶能力』この力は魔法の呪文を覚えるのにも使えてとてもいい能力です。

「マックスーこの計算教えてー」

「はいはい、えーと110×3784659385936485×3693745・・・・大丈夫、僕でも解けませんよ」

「・・・・・・・・・・そうよねー」

現在この書齋は僕とキュルケ、食事を持ってきたメイドさん以外の立ち入りを禁止しています。実のことを言つと、この世界、それどころか前世の世界にもなかったビームライフルを作っているからです。とはいえ、本当ににビームを放っているわけではなく、僕の魔力をエネルギーとし、それを銃弾に変換して撃ち出すビームライフルですが・・・材料は僕が錬金によって作りだした金属です。

「ねえマックス、ホントにそれ撃てるの？」

「ふー撃てますよ。外に出てみますかね久しぶりに・・・そうだ、今の質問に答えるための実験を行いましょー」

「久しぶりに外に出るわねホントに・・・・・・・・」

「ええ、49日ぶりですね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゴーレム」

体長20メートルの鉄製ゴーレムを作りだし、それを500メートルほど離れたところまで歩かせ、ビームライフルを、うつ伏せになるようにして構える。スコープを除き、しっかり狙う。

魔力の装填を開始する。

「早く撃ちなさいよ、それとも撃てないの？」

キュルケがそう言いたくなるのは分かりますが、初めて撃つので魔力を込めるのが難しいんですよ・

そろそろいいですかね、いつぺんに込めず少しずつ込めていたので時間がかかってしまいました。

「当たれええええええええええー」

ビームライフルの銃口から飛び立った桜色の閃光は鉄製ゴーレムに当たり、一切の痕跡を残さないほど破壊した。

「・・・・・・・・マックス、やりすぎ・・・・・・・・」

「魔力を込める量を当初の予定より多くしましたから」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この桜色の閃光を、何事かと思い、メイドや、執事が出てきたが、そこにはライフルを持ったマックスと、それを見るキュルケしかお

らず、何があったのかさっぱり分からないまま屋敷の中へと戻っていきます。

現在僕とキュルケは、父に呼び出され、執務室で質問という名の取り調べをうけています。

「んで、お前が書齋にこもりっぱなしになってこの……」「ビームライフルです」そうビームライフルを作っていて、撃つと、桜色の閃光が放たれると……

「はい」

「にしても凄かったわね、ゴーレムが一撃で消し飛ぶんだから」

あ、キュルケ、何言っちゃいけないこと言ってるんですか。量産するなんて言われたら一生ひきこもりじゃないですか。だいたい製作段階で半端じゃない精神力を消費するから30ちよっと作ったら廃人になりますよ。

「それは凄いな、マックスのことだから土じゃなくて金属製のゴーレムだったんだろ」

そうですね、でももう何を言われてもまた作る気はないですよ。それに作り方を教えても他の人には作れないでしょうし……

「マックス、そんな嫌そうな顔をするな、別にまた同じものを作れ、とかは言いださないから」

「本当ですよね」

「何よ、もう作らないの？」

「……作りたくないです、それにあれ、とても危険な兵器なのであんまり作りたくないですよね……今回は興味本位で作ってみたようなもんですし、まあ、オリジナルの合金が開発されたのでその点に関してはすごくいいのですが……」

「キルケ、これは危ない兵器なんだ、これをたくさんマックスに作らせれば確かにうちの騎士団は強くなるだろうね、だけど合同演習の時や、スパイにこれがどんなものなのかばれてしまえば各地の貴族の騎士団に作ら「これは僕以外には作れないと思いますよ」……自信が満ち溢れてるな……じゃあ、うちから買って配備されるだろう。つまり、配備された分だけ死ぬ人が増えるんだ」

「そんな、じゃあマックスはなんで……」

そこで話を振らないでほしかったんですがね……実を言うとキルケを含め、誰にも言っていないことがあります、魔法をたくさん使って精神力が切れれば倒れたりしてしまうことはありますが、僕の場合、ある程度使うとめまいに襲われるんですよ……だから魔力の使う量を少なく、威力を大きくするものが欲しかったんです。それで、ビームライフルは作れるか、という興味と、少量の魔力で高威力の攻撃を放てるようにする、ということが結びついてこなくなっただけですよ……ここは嘘をついておいた方が上策ですかね……無駄に心配させる必要ありませんし……

「弾薬の問題ですよ。通常の銃なら弾薬がないとただの棒きれと同じ程度にしかなりません。ですがこれなら弾込めの時間も必要ありませんし、弾薬も必要ありません、魔力が切れるまでは一人で無敵の要塞と化すことも可能でしょう。正直言って、もし戦場に出た時に魔法だけで生き抜く自信なんかいつさらありませんしね」

「ふーん」

「……」

まあ誤魔化したでしょうかね……次は戦闘機とか作ってみたいですね、まあ当分先まで作れないでしょうが。

「それはいいとして父上」

「ん、どうした？」

「近年の領地の状態を記録した物があれば読ませていただきたいのですが」

「作物の収穫量とかでいいか？」

「はい」

「明日には読めるように準備してやってやる」

「ありがとうございます」

さて、とりあえず内政シートを発生させて領内を裕福にしますかね。

オリジナル魔法の開発とおまけの品がやって来た。

この前ビームライフルの試し撃ちをしてから5日がたちました。ついでにあのビームライフルの名前も決まりましたよ。『魔砲・桜花』という名前です。この前父上に頼んでおいた領内の状態を記した書物も読み終わりましたし街に出かけようと思つて父上に相談したら却下されてしまったんですよね……。何ででしょうか？

「街に行きたいですね……」

「じゃあいつしよに行きましょうよ」

「行けないからぼやいてるんですよ」

キュルケもアイデアがないみたいですし……。困りましたね。アーロンに相談してもアイデアなんかないでしょうし……。今度は自分オリジナルの魔法でも作り出して力を認めさせますかね。

マックスはズボンのポケットから真つ白の本を取り出し、開くと普通に読みだしてしまう。当然、近くにいたキュルケが気になり覗き込むが、まったく意味が分からない文章であった。当然と言えば当然、マックスの前世の世界にあったアニメや小説の必殺技の名前とどういふものなのかということが書かれた資料を選択して探しているからだ。

「何なのよこれ」

「資料ですよ、ちょっと新たに魔法を開発してみようと思ひましてね」

「なんてことをしようとしてるのよっ」

「ひふあひでしゅ（痛いです）ふおふおおふふあふあにやいてくたしやい！（頬をつままないでください！）」

「なんかかわいいわね」

「じょうじえもふいふいきやらふあにやふいてくたしやい（どうでもいいからはなして下さい）」

「分かったわよもう・・・」

キュルケはそう言うと頬から手を放してくれましたが絶対に爪を立てていましたよ、突き刺さるような痛みがありましたもん。はあ、まだ痛いですよ、魔法で治した方がいいぐらいですよ、この痛み。

「ヒーリング」

マックスが放った魔法は、頬の痛みを少しずつ消していく、また、つねられていたことよって付いた赤みも少しずつ引いていく。

「まったく、なんてことするんですか」

「あなたがすごく大変なことをさらつと言っからじゃない。そんな簡単なことならみんな自分のオリジナル魔法を持つてるわよ」

確かにそうなんですけどね、前世の記憶のある僕ならさまざま自然現象やアニメなどの必殺技をもとに簡単にできちゃうと思うのですよ、げんにほら、『魔砲・桜花』を作りだしちゃいましたし。これはガンダムのビームライフルをもとにしましたからね。

「魔砲・桜花だってちゃんとできたじゃないですか、やってみたっていいじゃないですか、それにやってみなきゃ最初の一步も踏み出せてませんよ」

「そりゃそうだけど・・・あーもういいわ、でも私にも手伝わせないさい。それが条件よ」

「はあーっしょうがないですね」

現在訓練場で新たな魔法の開発中です・・・が、キュルケはやる気がないです。絶対に作れないと思っっていますね。

とりあえず試してみる魔法は、レールガンですかね。現在僕は風と火がスクウェアクラス、水と土がトライアングルです。電気のタイ

ブは風の系統だそうですね……あ、詠唱も考えなきゃいけないんですよ。ここは口語による詠唱にしましょう。そのほうが考えやすいでしょうし。雷よ、我が矢弾となりて道を切り拓け、超電磁砲レールガン……変えましょう……

アイデアがない……もうこれでいいです。

「キュルケ少しいてください」

「なに、もうできたの？」

「アイデアだけですよ……」

まったく喜んでないでどいてほしいんですがね……あ、どきましました。

「雷よ、我が矢弾となりて道を切り拓け、レールガン」

杖にどんどん電気が集まっていき、青白く光り出す。光は杖の先端に集まりながら膨張していく。そして、高圧電流の束は杖から離れ一直線に進み銃の練習用の的を撃ちぬく。

「キュルケ、できちゃいましたよ」

あれ、大丈夫でしょうか、腰を抜かしたのか座り込んでいますよ。というか肩が震えていて怖いんですけど……なんで……なんででしょうね、額に青筋が浮かんでいます。

「大丈夫ですか？」

あ……れ……？

なんで、睨まれてるんでしょうか……ね？
というか軽く泣いてますよ。

「なんで」

「？」

どうしたんでしょう？

「なんで」

どうしたんでしょうかね本当に。

「なんで、私が使えない系統の魔法作るのよ、私が使えないじゃないの」

「あ……」

すっかり忘れていました、キュルケは自分もやるってことで新しい魔法を作れることを許してくれていたんですね。はあ、次は火の系統魔法を作りますか……

「すみません。次は火の系統の魔法考えますから、ね。」

「うっ、分かったわよ」

はあ、泣きやんでくれませんか。少し原作のギーシュっぽくギザなセリフでも吐いてみますか。

「泣きやんでくださいよキュルケ、あなたに涙は似ありませんよ、笑顔こそが最も美しい顔ですから」

「え、う、うん」

……僕の心が深くえぐられた気がします。まあ、キュルケが泣きやんでくれたことだけでも良しとしましょう。

まったく、なんてことを急に言うのよ……絶対に何も考えずに言っただけ、それだから太刀悪いし。はあ、何なのよもう。

火か、火の系統なら灼眼のシャ○辺りから持つてくるのが妥当でしょうかね。検索キーワード灼眼のシナに設定、検索開始……

神からもらった本ですが便利です。さっきみたいに頭の中で本を持

つたまま検索キーワード決めたりしなきゃいけないこと以外は。
．．．．．炎弾はファイアーボールやフレイムボールの類が
ありますしね。マティルダ・サントメールの騎士団ナイツにしましょう。
あれはどう見ても炎でできてますし。それに炎でできた騎士団とい
うのも結構かつこいいですし。

詠唱をどうしましょうか。騎士団を召喚しているわけですしねえ。
火、それは破壊をつかさどる系統、我が騎士団となり敵を粉碎せよ。
．．．．．

やっぱないほうがカッコいい気がするんですよ、気のせいでしょう
か。まあとりあえずナイツを使えるかやってみましょう。

「ナイツ」

周囲に火が現れ、それが剣や槍をもった兵士の形をかたどり始める。
そして、周囲に30余りの炎の騎士でできた騎士団が現れた。

「キュルケ、今度のは使えると思いますよ」

「．．．．．ありがとう」

ふう、あとはキュルケ、あなたの努力次第ですよ。

「ナイツ」

現れませんか．．．

「ナイツ」

．．．．．駄目みたいです。

「ナイツ」

．．．．．出てきません。

「ナイツ・ナイツナイツナイツナイツナイツナイツナイツ」

出てこないうえに噛みましたね．．．

「出てこないじゃないの」

「後は努力次第ですよ、しっかりイメージを持って下さい。精神を
集中させて、自分の周りに騎士団がいることをイメージしてください
い
い」

「ナイツ」

バツ

そんな音と共にキュルケの周囲に炎の騎士団が現れる。

「で、できた」

ええ、できましたね、まだ10しか出せてませんがそのうちもつと出せるようになるでしょうね・・・

楽しみですね自分で考え教えた魔法がどのくらい使いこなしてくれるのか。まあ当然僕も使うだろうな。

ついでにこれ、ゴーレム出すより精神力喰わないんですよ、それに簡単な指示で動かせるのでゴーレムみたいにずっと意識していきやいけないということもないですし、とても楽な魔法ですね。

結果この日の間に10の魔法を作りだしました。とくに最後の奴とかが最強でした。詠唱破棄スベルアウト、これの効果は呪文とか唱えずに頭の中で使いたいと思いつながら術名、ファイアーボールとか言うだけで魔法が放てちゃうようになりました。詠唱なしなので戦闘に物凄く強いんです。ちなみにキュルケに教えたならキュルケも使えるようになってしまいました。

というか何ででしょう、今日の成果全て見せたのに相変わらず父上は街に出ることを許してくれませんでした。

代わりと言えば代わりの物を手に入れました。二つ名です。父上によるとこの年で二つ名を持っているのは早すぎるそうですが。まあそれはいいとして貰った二つ名は『教授』です。理由は『魔砲・桜花』を作り出したことや、新たな魔法を作り出したことだそうです。まあ、今回はこれでよかったですということにしましょう。

オリジナル魔法の開発とおまけの品がやって来た。(後書き)

できればいいので感想をください。

それとなんかオリジナル魔法のアイデアがあれば教えてください。

二人分の現在のキャラ設定

『教授』 マクシミリアン・フォン・ケンプファルト

本作の主人公。髪は前世と同じ色にするようにと神に言ったせいで黒色である、というより外見をまったくいじられていないので前世の容姿まんまである。十人が見て七人が綺麗でカッコいいと言う容姿ではあるが、髪を切るのが面倒のため伸ばしっぱなしにしている。ポニーテールにしている。そのせいで知らない人が遠くから見たら女の子に見えてしまう。ポニーテールにした理由はなんとなく。普段マクシミリアンと呼ばれることはなく、マックスと呼ばれる。

魔法は風と火がスクウエアクラス、水と土がトライアングルクラス。ただし、魔法の使用できる限度が目まいが発生する影響により早く来てしまう。大体の限度の目安は精神力の約5割。これ以上使うとめまいが起こる。

疑似ビームライフル『魔砲・桜花』を作りだした理由は興味と、精神力の使用力を抑えても使える高威力攻撃をできるようにするため。

『教授』の二つ名の由来は新たな魔法を作りだしたことで、『魔砲・桜花』を製作したことからである。

『城壁』 コンラート・シュヴァリエ・フォン・ケンプファルト・シユトウツトガルト

マクシミリアンの父親。金髪青眼正直言ってかなりのイケメンである。あまり細かいことを気にしない主義である。ただ、マクシミリアンに対しては親バカである。

魔法は土のスクウエア。他の系統は全く使えないが『烈風』の力リンと戦える数少ない実力者である。『城壁』の二つ名は『烈風』

のカリンのカッタートルネードを防ぐために高さ30マイルに及ぶ
アースハンドを隙間なく距離50マイルにわたって顕現させ、それ
を錬金で土を鉄に変え城壁のようにして防いだことからつけられた。
『烈風』のカリンとは系統は違うものの、師弟関係であった。

お小遣いが欲しい(前書き)

新しい魔法まだ募集中です。

お小遣いが欲しい

六歳になったマクシミリアンです。うちの家は黒字続きで借金なんでもものはなく、街はとてにもぎわっています。そのため、それなりの私設軍がいたり、屋敷が大きかったりメイド（10歳ぐらいから40歳ぐらいいまで）が50人以上いたり（というか年々増えてる）とかなり規格外のほうです。それにツエルプスト一家と並ぶ有力貴族の家系ですしね・・・

ですが、正直言って僕はあまりお金を使えません。もらえるお小遣いは金庫にたまっていく収益に対して物凄く少ないのです。というか一ヶ月10エキュー、まあ確かに平民の平均年収が120エキューだそうですからそれと同じなのです。何かを作ろうとすると材料を買わねばいけません。錬金で大半の物を僕は作り出せますが、作れないものもあります。それを買うとためてたお小遣いがああ・・・となることが多々あります。『魔砲・桜花』を作った時はそれまでのお小遣いをすべて消費しました。とまあ簡単に言えば金欠に陥っています。お金がないってホントに不便です。ということでは何かをして儲けようと思います。

.....
.....
.....

.....

魔法を使えるのだから魔法を上手く利用した方が儲かるでしょうね。生活面に関してチートの的な能力を発揮するのは土の系統ですからね。やはり土の系統を利用したとして、錬金ですかね。錬金なら簡単にできて対して高価じゃない物資で物を作り出せますし。

あ、錬金だと多少不純物が混ざるんでしたね、どうしましょうか。
・とりあえず大量に何かを作って街の商人に売るように誰かに頼みますかね、あ、いいこと思いつきましたよ、ククククク。

我が家は結構広いです。4リーグ平方チヨイぐらいの面積が私有地ですから。この家はこんな広いのに池がありません。あるのは荒地と森と訓練場です。原作でラ・ヴァリエール家には池があったのに、この家に池がないのは個人的に許せません。というか水場があった方がいろいろ遊べて楽しいじゃないですか。なので池を作ります。ただ池を作るなんてのはもったいないです。なので、池を作るために掘り、それで発生する土砂を錬金の材料にすればいいのです。もちろん庭の掘削も自分で行いますよ。掘る時に魔法を使えば魔法の鍛錬にもなるじゃないですか。

位置は決まりました。穴を掘るのに使えそうな魔法はカッタートルネードですかね。

「カッタートルネード」

呪文を唱えると、竜巻が現れ、地面をどんどん削っていきます。当然土砂は近くに落としてますよ。

池を掘ることができました。ここに近くの川から水を引けば完成です。まあ、とりあえずそれは後にして。錬金に移りたいと思います。僕が錬金できるものの中で最も高価と思われるのは鉄です。

「錬金・錬金・錬金・錬金……」

錬金と僕が言うたびに土砂が鉄に変わっていきます。少しずつ鉄に変わっていく様子を見ているとなんか怖いです。茶色の土砂が黒っぽく変わっていくんですよ。浸食されていくみたいじゃないですか。

ハア、ハア、ハア、だいたい、半分、終わりましたよ。ここまでやるのに結構の精神力を消費してしまいました。このまま消費してしまえば立ち上がれなくなるんじゃないですかね。既に半分に近い量を消費してますからね。雨も降りそうな天気ですし錬金したものに固定化をかけて今日は屋敷に戻りましょう。

マックスは何をやってるんだか、キュルケをほったらかしにした状態で庭をうるつくのはこれまでになかったはずなんだが。何か考えがあって庭に出ているんだろうが何をするのか言って出ればいいんだけどな。これまでも随分と面白いものを作りだしていたし今回も何かを作りだすんだらうな、少し観察していればいい話か。

何をやっているんだ？カッタートルネードなんて攻撃用の魔法だろうに。別にゴーレムを作りだして威力の実験をしているわけじゃないさそうだ。放つ前にゴーレムなんて見えなかったしな。ん？地面を削ってる？間違いない。地面を削ってる。削ったものは近くに落とすように削る。地面を削ってる。削ったものは近くに落とす気なんだ

か・・・・・・・・

まさか地面を削ってその土砂を鉄に錬金で変えるとは思わなかったな。鉄なんて作りだして何をする気だ。あ・・・帰ってくる。見ていたことがばれないようにしなくては。

「ただいま戻りました」

「おかえり」

父上に珍しく迎えてもらえたのはいいんですけどなんで焦った感じなんですかね。気になるのですがここは黙っておきましょう。

夕食の時間

食事の時間なのにとっても空気が重い。「なんで楽しい食事の時間を重苦しくするのよ」とマックスに目線で訴えてもまったく気づいていないわ。それどころか（ハハメ）と笑顔のまま青筋を浮かべてるし。で、滅多に起こらないマックスが怒っている対象であるコンラート様は角が生えてきそうな勢いよ。ああ、凄く食べにくい。でも早く食べないと覚める。ああーもうどうしたらいいのよ。と思いマックスの母親を見ると舌を出して見せるし、お手上げって意味なのかしら？もう街に出ることなんかしばらく諦めてよ・・・

「ファイアーボール」・「ロックスピア」・「ナイツ」・「クリ
エイトゴレム」・「ウィンディアイシクル」・「うおっ、アース
ハンド・錬金」・「カッタートルネード」・「この壁をその程度で
敗れるわk「錬金」実の父に向かって容赦がないな、アースカタ
ー」・「エアシールド」・「ロックキャノン」・「レールガン」・
「うぎゃあ」

食卓で魔法使わないうで欲しいわ……

結局、マックスがコンラート様をレールガンでぶつとばして街に出る許可を取っていたんだけど……食欲が無くなったわ。食卓が燃えていたり、デザートの上に砂が積もっていたり、魚に電気が流れていてバチバチいってたりするのよ。とうぜんだとおもうわ……

昨日の続きで残りの土砂は錬金して鉄に変えました。後はこれをレビテーションで持ち上げて街まで運ぶだけです。ですが、結構大変でした。あまり自覚がなかったのですが、かなりの量を錬金していたらしく、レビテーションで持ち上げるだけでかなりの量の精神力を消費しました。にしても、周囲の護衛が邪魔なんですよ、ゆっくり街を見れないじゃないですか。まあ、レビテーションで持ち上げているのでそんなに長い間は見て回れませんが、周囲の人が少し引いているので話しかけても逃げられるでしょうが……

金属を扱う店にやってきたのはいいんですが、鉄を置く場所がありません。どうしたらいいのでしょうか。悩んでいたら護衛の一人が金属商を中から呼んできてくれました。

「こ、これは？」

「錬金で作りましたが買い取ってもらえませんか？」

「しばしお待ちください」

商人の方は土メイジらしく、僕の錬金した鉄に触り、純度を調べ出しました。ていうか何で商人の方の顔が青くなっているんでしょうね、病気でしょうか？と思っっているとんでもないことを知ってしまいました。

「本当に錬金で作られたものなのですか？」

「ええ、そうですね。僕が作りました」

「・・・この鉄は天然もののようにとても純度が高いです。というよりも100%でございます」

「は？」

いまこの商人の方はとんでもないことを言っただけです。純度100%だなんて、普通、錬金ではどんなに頑張っても70%ぐらいじゃありませんでしたっけ？

「この量です。1000エキューで買い取らせていただきたいのですが」

「・・・とんでもない値になってしまいました・・・」

「はい、いいです」

「ありがとうございます。本来、天然ものであればもっと高値なのですが錬金だということだそうで、この値にさせていただきます」

「ああ、結構ですよ。それより買い取って下さりありがとうございます」

こういうとき日本人なのでしょうね自分も、お辞儀してしまいました。

「ひ、そんなことさせた他の貴族様に知れたら私の首が飛んでしまいます」

「あ、ごめんなさい、つい。でも大丈夫ですよ。何かあったら助けますから」

この世界の貴族はホントに馬鹿ばっかで平民差別なんかしてますがね、平民がいてこそ貴族は成り立ってるんですよ。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、平民だって貴族だって同じ人間なんですから」

「ほ、そんなこと言われる貴族様は初めてですよ」

「じゃあ、最初の人ですね」

「ええ、そうですね。それと、これからまた鉄を錬金して私に売って下さいませんか」

「え、いいんですか？」

「こつちも大儲けできますので」

「そうですか、じゃあ、砂を僕の屋敷に届けてください。分かりますがケンプファルト家のマクシミリアンです」

「やはり『教授』様でしたか。砂程度であればお安いご用です」

「二つ名が有名になってしまいましたか」

「新たな魔法を作りだせば当然ですよ、でもどんな魔法かは知られてないんですよ」

「そうですか、ではまた」

「ええ、あ、私の名前はアルフォンス・トールレスです」

「僕はマクシミリアン・ド・ケンプファルトです」

こうして初めて街へ出た一日は終わった。

1000エキューをその場で渡された時は本気で困ってしまっ

エルフとの遭遇

キウルケもここ最近やってこなくなつてさびしいような落ちついたようないまいち分からなくて困つてゐる七歳になつたマツクスです。今は前と違つて金欠で悩んでいません。アルフォンスとの契約で定期的に鉄を錬金して作りだしてそれを売つてますからね。それにちよつと前から亜人や、盗賊などの討伐依頼などを受けるようになったので、そちらの方面からお金が入つてくるようになりました。討伐では実戦経験も積めるので一石二鳥です。それと錬金を定期的に行つていた副作用か、土がスクウェアになりました。正直言つて神、やり過ぎだと思ひます。

今は父上が街に出るな—と言つこともないので自由に動いています。杖は持ち歩いて出ることはありません。貴族つてはれると「めんどくさい」の一言に尽きる状態になるんですよ。その代わりスペアの杖である、指輪やネックレスを着けています。おかげで貴族とモバれず、平民で仲の良い方がたくさんできました。

とまあ、近況報告はこころまでとして、今取り組んでいる事業があります。自分で儲けたお金でたくさん水のメイジを雇つています。この方々を各地に送り、病院を作つています。ハルケギニアの貴族は基本的に、『平民が国を支えている』ということをつかつかつていないです。なので、福祉などのシステムが全くなかつたりと、病気でどで死んでしまふ人がたくさんいるのです。正直言つてそんなけるより、病気とかにかかつて、治してあげた方が税など収集も良くなります。それと平民のための学校も作りました。平民が文字を読めたほうが物の需要が上がつて景気が良くなつたり、計算ができたほうが税の徴収にも便利ですからね。それと病院と学校については無償化させました、でないとお金がかかつて使えないつて人が出てきますからね。

街、屋敷の周囲にできている街（ケンプファルト街と言つ市名だそ

うです)に武器工場を作るように指示しています。武器は大量生産できたほうがいいですからね。この武器はそのうち各地域に送り、巫人などに村が襲われた時のための対策として訓練もさせる予定です。

で今から僕が行こうとしている場所は、『砂漠』です。

エルフが住んでいる場所。ここに行つて貿易でもしようかと思つています。もちろん表だつて貿易を行うとロマリアの方々に睨まれますから、あまり目立たないようにですが。

「エルフと貿易なんかできるかーリーストーンヘッジ」

「そうですねマックス、アクアボール」

「やってみなきゃ分かんないでしょう、カッタートルネード」

「無理に決まつてるだろ(わ)。ロックスピア(ウィンディアイシクル)」「

父上も母上もなんで危険な魔法を・・・

「グハッ」

「あ、やばっ」

当ててからそんなに焦るだなんていい度胸してるじゃないですか。

「ククク、ふ、ハハハハ、やりもしねえで無理に決まつてるだど？笑わせんな。そういう言葉はな、全力尽くしてやった後に言う言葉なんだよ」

「ま、マックス?」

「風、火、水、土、全ての精霊よ、互いに共鳴し我が力となせ。スperlアウト」

「あゝ?・・・なにも起こってないよ「ファイアーボール」詠唱なし!？」

「まだまだあーウィンディアイシクル・アイシクルジャベリン・カッタートルネード・ロックスピア・エアーカーター・エアハンマー・レールガン・ウオーターカッター」

「うぎゃあああああ」

マックスがオリジナル魔法を作っていたのは知っていたが、詠唱なしにする魔法までとは・・・クツ、軽くエルフより強いんじゃないか？・・・アリスはまだ目をまわしてる。マックスは肩で息をしてるか？さすがにあれだけの魔法を・・・平気な様子だと！マックスの精神力は底なし沼か？

「わ、分かった。これだけ強いんだったらエルフにやられることもないだろう。砂漠に行つていいぞ」

「ありがとうございます、父上」

「にしてもさっきの魔法は何だ？」

「スペルアウトですか？あれは今後一切詠唱なしで魔法を使えるようにする魔法ですが」

「そ、そうか。（それにしてもさっきの豹変は凄かったな。いつも怒らない分余計に怖かったということもあつたにはあつたが）」

荷物、特に食糧を持ってエルフの住む砂漠にやって来ました。ここまで来るの大変だったんですよ。砂漠に行くなんてロマリアの糞坊主が許してくれるわけないんでどの国家にもばれないぐらいの高度をフライで飛んで来たんですよ。にしても寒いつたらありやしなかったですよ。寒さのせいで眠気を誘われて仏様って可能性もありましたからね。にしても砂漠は広いですね・・・周囲を見回しても砂砂砂ですよ。本当にこんなところに生き物なんて居るんですかね。いたとしても数日で死んじゃうでしょうに、にしても何でエルフはこんな土地に居るんでしょうね？

「・・・今一瞬殺気を感じた気がするんですかね・・・暑さでおかしくなつたんでしょうか？」

杖を構えておいた方がよさそうですね・・・

「蛮人よ、杖をおけ」

っ、どこから。

「早く置かぬか」

置いた瞬間に魔法でぶっとばす気なんでしょうね。置いて魔法を放たれるんでしたら持つていたほうが言いにかまってるじゃないですか。

「置かぬなら、喰らえ」

案の定魔法が飛んで来ましたよ。エアカッターみたいなものが来ましたね。

「エアシールド」

でもこの程度なら楽に防げちゃうんですよ。

「何！」

「そっちから来ないならこっちから行きますよ。ウィンディアイシクル」

氷の矢が周囲に展開され、エルフに向かってはなたれ

「くっ」

反射の先住魔法に反射させられこちらに向かって帰ってくる。

「ファイアウォール」

帰って来た氷の矢は全て炎の壁に溶かされる。

「さすがに強いですね、じゃあ、これでは？ ナイツ」

周囲に炎の騎士団が40人ほど現れます。

「騎乗」

掛け声とともに、ナイトの下から炎の馬が現れ、ナイトがそれに乗り、

「突撃」

エルフに向かって突撃をかけます。

何なんだ、珍しく蛮族が現れたから追い払ってやるうと思っただら帰るところかこちらと互角の戦いだ。

くっ、それに、なんだこの変な騎士団は。どンドン湧いてくる。

「カッタートルネード」

くっ、危なかった。この魔法でこいつらをふっ飛ばしていなかったら俺はやられていたぞ。蛮族はどこだっ

「こっちですよ」

なにっ、後ろだと、まさか、さっきの騎士団は目くらましで・・・

「ティロフイナール」

蛮族が大きな大砲のようなマスケット？を持ち、その周囲にふつうのマスケットが浮かんでいた。そして、それらの銃口が火を噴き、弾を放つところまでを見て、意識が飛んだ。

「あ、目、覚めましたか。今お茶入れますね」

なんだ、俺は蛮族に撃たれ死んだはずだ。なのになぜ蛮族が傍に居る。

「そんなに睨まないでください。やりすぎちゃったのは反省してますから。紅茶ですよ」

なぜ蛮族が俺に茶を。毒でも混ぜているのか。

「毒なんか混ぜてませんよ。もしあなたを殺す気ならさっき殺します」

・・・蛮族の入れた茶など気が引けるが、まあ、今はいいだろう。

「蛮族よ、何故俺を殺さなかった」

これだけは聞いておかなくては。蛮族が我々エルフを殺すには出血がとても大きい。なら殺せるときに殺して数を減らした方が得だろうに。

「ああ、それですか。そっちならいいですよ。エルフの方々と貿易

したり仲良くしたかったので。

「何だと！」

「?どうかしました？」

「これまでお前ら蛮族は我々と戦ってばかりだった。それなのになぜ急にそんなことを言う」

「・・・あなた方が我々に何かしましたか？過去の歴史であなた方から我々の住む区域に攻め込んできたことは一度もない。それなのにこちら、正確にはロマリアのバカ達は聖戦と掲げてあなた方の住む、ここに攻め込んでいく。僕には無意味なこととしてしかとれないのですよ。だから、あなた方の言う蛮族の総意識ではなく、僕個人の意志としてここに来て、あなた方と仲良くなりたかったのですよ。別にあなた方を殺しに来たわけではありません」

「・・・そうか、すまなかった。お前は他の蛮族とは違うようだ。さりげなく嘘かどうかを見分ける魔法を使わせてもらっていたが、本当のようだった」

「そうですか。魔法を使われていたのは気に食いませんが仕方がないことですからいいですよ」

「それと、知らない魔法を二つもお前は使った。あれはなんだ蛮族よ」

「ははは、あれは自分で作りました。ですが詳しいことは教えられません。それと僕は蛮族なんて名前ではなくてマクシミリアン・フオン・ケンプファルトです」

「そうか。俺の名前はミハエルだ。ここに居てもなんだ。俺の集落に連れて行ってやる」

「いいんですか？」

「ああ、これでも族長でな」

「ありがとうございます」

砂漠の中に、突如『村』は現れた。

オリジナル魔法の解説

マクシミリアン、マックスが作り出した新たな魔法についての解説をしようと思います。

レールガン

某学園都市のlevel5の超能力をもとに製作された魔法。

風×4なので風のスクウエアにしか使えない。

射程距離は、どこぞの女子中学生と違い、50メートルで消える。なんてことなく。150メートルぐらいが射程距離である。

ナイツ

赤い目と赤い髪を持つ少女が契約している魔人、天壤の劫火アラストー○の先代の契約者、マティルダ・サントメールの使っていた技のコピー。

ただ、本人より多くのナイツを召喚できてしまったりする。

火×3トライアングルスペルである

スペルアウト

詠唱なしで魔法が使えるとべんりだな、という考えから生まれた魔法。元ネタは無し。

風×火×土×水。スクウエアスペル

ティロフィナーレ

魔法少女○どか マギカの巴マミの必殺技？を改造した魔法。
巨大なマスケット（マスケット銃）？とマスケットが現れ、相手を
撃ちぬく。

火×火×火×土 スクウェアアスペル

本編でまだ登場していない魔法

A・Tフィールド

エヴァンゲリ○オンからのコピー魔法

風×風×風×水スクウェアアスペル

ヴィバーシオン

alan様のアイディアの魔法。

対象の水分子を振動させ、熱を発生させる魔法。
魔法版電子レンジ。

水×1 ドットスペル。

オリジナル魔法の解説（後書き）

他にもオリジナル魔法についてのアイディアがあったら教えてください。
さい。

alan様ありがとうございました。

殺戮のカミーユ

砂漠の中の村は、そこを砂漠と思わせるようなものではなく、どこにでもある村のような村だった。まったく寂れているということもなく、逆に活気があって、いい村だ。

「凄いですね」

「そりやそうだ、俺達エルフが試行錯誤して作った村だからな」

現在僕はエルフのミハエルと共に、彼の村にやって来ました。

僕が人間だからなのでしようが、みなさんからの視線が痛いです。

「ミハエルさん」

思わず袖を引つ張っちゃいましたよ。

「おお、そりやそうだ、蛮族がこの村にやってくるなんてありえないからな。皆睨むな。こいつは蛮族だが客だ」

ミハエルさんが僕に敵意が無いことを言っても睨んできますね。とりあえずここは……

「マクシミリアン・フォン・ケンプファルトです。みなさんと仲良くしたくてここに来ました。敵意はありません」

「おいミハエル、蛮族なんか連れてくるなんて何考えてやがる」

強そうなエルフが歩いて来てミハエルさんに問い詰めていますね。

というかこのエルフの方、強いですね・・とんでもない魔力を感じます。今感じている中では最も強力な力です。

他のエルフもやって来ましたね

「立ち去れ、蛮族よ。今ならまだ手を出さん」

いや、あなたの右腕に物凄い勢いで大気の揺らぎが発生していますよ。それこそ刃のように物を斬れそうな……

……

「だから、僕はあなた方と仲良くしたいだけです。魔法を使って真偽を確かめてくれても構いません」

つていつの間にか囲まれているんですけど……

「蛮族にそのような魔法を使う必要などない」

「……話を聞いてくれそうにありませんね。どうしましょう」

「お前らやめないか。こいつにさつき魔法を使ったが他意はなかった」

「しかし族長、蛮族ですよ」

あ、ミハエルさんって本当に族長だったんだ……

「こいつはさつき俺に戦闘で勝った。そして俺は致命傷の傷を受けて気を失ったんだ。んで目が覚めた時には傷が治ってた。それはこいつが治してくれたからだ。もし俺達に敵意があるのならこいつは俺を見殺しにしていただろう。だがこいつはそうしなかった。それは敵意が無いからだろう」

「族長がそこまで言うのならこいつに敵意が無いのは認めてやる。

だがな、俺達は戦闘部族月影だ。雑魚を客人として認めるわけにはいけねえ。族長はこの部族で一番強いわけじゃねえ。この村で一番強いのは俺だ。俺に勝ったら客人として認める。それでどうだ」

やはり最初に突っかって来た人が一番強かったんですか。まあ、実力を示すという意味でいいでしょう。

「いいでしょう、受けますよ」

「おい、マクシミリアン！」

「平気ですよ。もし負けたら帰りますよ」

「おもしれえ、さつさと退場させてやらあ」

「……五分後、コロシウムに両者集合。見学は自由だ」
は？コロシウムなんてあるんですか……どんだけ戦闘が好きなんでしょう？

にしてもミハエルさん、そんなに心配そうにしてくれなくても……
「大丈夫ですよ、本気でやりますから。勝っても負けてもそれなら清々しいですから」

「……いや、そうじゃない。あいつ、カミーユは俺達の部族の中でも桁違いに強い。死ぬんじゃないぞ」

「……そんなに強い方なんですか。まあ、頑張れば何とかなるでしょう。徹底的に罠にはめるとか。」

「わかりました。死にません。勝ってきますよ。」

「そうか……。」

「コロシアム」

「逃げずに来たか」

「来ましたよ。カミーユさん」

「けっ」

イライラしてますね。こういう人は罠にかかりやすいんですよ。

審判はミハエルさんですか……

「両者、名乗りを上げて、俺が投げたコインが地面に着いた時を試合開始とする」

「ふんっ、殺戮のカミーユ」

「教授、マクシミリアン・フォン・ケンプファルト」

「コインが宙を舞い……地面に落ちた。」

「ファイアーボール」

この前使ったスペルアウトの効力によって詠唱が必要ない分こちらが有利です。

「詠唱なしだと。だが」

「っ、やっぱり反射で効きませんか……」

「ファイアーボール・ウインディアイシクル」

炎の球と氷の矢が、カミーユさんに襲い掛かり、跳ね返される。

それと同時にカミーユさんの魔法が放たれ……

「エアハンマー」

「なっ」

今のエアハンマー危なかったですよ。当たったら骨の2、3本じゃ

すまないですつて。

「ガラガラ……」

後ろの壁が崩れたんですけど……

「ちっ、はずしたか……」

殺す気満載のようですね……なら、族長と同じ手で……

「ナイツ」

炎の騎士団が50人ほど現れ、

「騎乗」

下から現れた炎の馬に乗り、

「突撃」

カミーユさんに襲い掛かります。これで目くらまし程度なら……

「なめてんじゃねえ、カッタートルネード」

「なっ」

カッタートルネードによって全てのナイツが吹き飛び、消滅しました。これはヤバいですね……正直使いたくなかったことをやりませんか……

「ユキビタス」

風のスクウェアスベル、偏在、分身を召喚する魔法。分身した奴も魔法を使えるというチート魔法。

「風は偏在する」

バンツ、その音と共に、偏在が19人現れる。（本体を含めると20人）そして同時に……

「ナイツ」

各々が50人のナイツを召喚する。つまり、こちら側の兵力は1020人。

「騎乗」

1000人のナイツが同時に炎の馬に乗り、

「突撃」

突撃を仕掛ける。その間に、偏在はカミーユさんを取り囲むように

円を描くように移動し、追いつきを仕掛ける。

「テイロフィナーレ」

戦艦に配備される大砲並の威力を持つその砲撃は、一斉にカミーユさんを襲う。炎の弾丸の爆発の熱気は、肌の表面を焼くように吹き荒れる。

「これで、どうですか？」

徐々に、黒煙は晴れていき、中からは、重傷を負ったカミーユさんが出てくる。

「・・・反射発動してるのにこのダメージかよ・・・まあいい、今度はこっちから行くぞ。フレイムボール」

カミーユさんが放ったフレイムボールはフレイムボールの力で追尾機能があるため、相殺して防げないですね。ですがこのままでは・・・「エアカッター」っ、かわした先に・・・飛んでくるエアカッターにまで追尾機能！？本来エアカッターにそんな力は無いはず！

「っ、エアシールド」

よし、これでフレイムボールとエアカッターは防げる。？カミーユさんが、いない！？「後ろだ」

いつの間にか後ろに回っていたカミーユはマックスを蹴り、そこにファイアーボールで追撃をかける。マックスは前転で避け、反撃とばかりにウィンディアイシクルを放とうとするも、既にカミーユは移動しており・・・マックスの頭に回し蹴りを決める。

「ぐっ」

頭がくらくらします。さすがにこれはまずいですね。立っているのが精いっぱいというところでしょうか・・・このままだと敗北は確実ですね・・・偏在も消されました・・・

「いい加減に諦めな、確かにお前ならそこのエルフなら10や20ぐらい殺せるだろうがな、俺みたいな戦闘専門のエルフには勝てねえ。まあ、これでも全地域の中で屈指の戦屋5本指に入る俺にこっただけ傷付けたんだ。人間としちゃ規格外の強さだな」

「……勝たなきゃいけないんですよ。彼らエルフと仲良くなるためにね。」

「あなたは全エルフを含めて5番以内の強さということですよね。だったらなおさら勝たなきゃいけないじゃないですか」

「何だと？」

「勝つてあなたの方に僕を認めさせなくちゃなりません。対等な立場で話をするために」

「そう勝たなくちゃ話すらできないし。こちらを認めさせることができないじゃないですか。」

「……おもしれえ。そう思うこともできないぐらいに徹底的につぶしてやる」

カミーユさんに勝てる可能性のある策はある策はあと一つだけ。ただこの策は自分すらをも道連れにする可能性がある。もし自分の方にも魔法の余波が来たら耐えることはできませんね。というより絶対来ますよね……。まあ、やってみなくちゃ分からないですからね。

「カミーユさん、僕の残っている力全てをぶつけます。これで絶対に認めさせてやりますよ」

「ほお、面白い受けてやろうじゃないか」

「錬金」

そう錬金、錬金でコロシアムの地面を油に、大気の成分を水素と酸素に錬金する。

「錬金？錬金なんかで倒せるわけがねえだろうが」

「いいこと教えてあげますよ、カミーユさん。僕が錬金で変えた地面。これは油。大気は水素と酸素なんです。ああ、そう言えば大気の成分についての概念は無いんです。まあこれらすべて火でよく燃えるか、他の物が燃えるのを助ける性質なんです」

「何が言いたい？……まさか」

「そのまさかですよ」

「そう此処に……」

「マクシミリアン！」

この瞬間、マックスは、エルフの戦闘部族、月影に認められた。空は、遠くまで、青く澄み渡っていた。

殺戮のカミュー(後書き)

まだ魔法のアイデア募集中です。

Le souhait様、嵐ではなく竜巻として使わせていただきました。

開戦前夜

「知らない天井ですね」

まったく知らないところで目が覚めましたよ・・・イタタタタ、体の節々が痛みますね・・・そう言えば僕はカミーユさんと決闘して・・・

「おお、目が覚めたか」

「ミハエルさん」

部屋にミハエルさんが入って来ました。そうかここはミハエルさんの家オチですね。

「しばらく動くな。俺達の先住魔法を使ったとはいえかなりのダメージを受けていたらしくてな、後2、3日は休息が必要だ」

「そうですか・・・」

・・・体が全く動かない、なんてことはないんですけど動かそうと思うと痛いですね・・・

「にしても凄かったな。あのカミーユを倒しちまうなんて。俺達がまとめてかかったってあいつには勝てねえんだぞ」

・・・は？5本指とは言っていましたけど、そこまで？あ、そう言えば・・・

「ミハエルさん、カミーユさんは？」

「ん？あいつもそろそろ目覚めますだろ。にしても二人揃って3日も寝込むなよ、さすがに冷やっとならなせ」

三日も寝込んだんですか。相当なダメージを体は受けたようですね。んでお前がまた戦えるようになったら「また戦わせるつもりですか・・・」違うつ、ネフテスに連れて行くんだ」

へー最大部族のところに。というか原作知識を持つてる僕のような存在でないとネフテスって言われても分からないと思うのですが・・・え？戦えるようになってからの必要があるってことは、ネフテスで戦闘？

「ちょっと待って下さい」

「どうした」

「戦えるようになる必要が分からないんですが？」

あ・れ・？・なんで目をそらすの？

「……………」

「いや、それがな。俺達月影は全員お前の味方に付いたんだが、ネフテスに蛮族を仲間に迎え入れたことを言わずに乗り込むんだよ。

だから下手すれば、最大部族のネフテスと俺達の正面衝突って可能性がある。ここの戦闘能力は圧倒的にこっちが強いんだがな……

ヤツらは数が多いうえに五本指のうちの3人がネフテス所属なんだ、つまり……………」

「下手すれば僕も戦う必要があるってことですな」

なるほどそれなら……でもカミーユさんで……

「でもカミーユさんあんなに強いんだし一人で無双してくれるんじゃないですか？」

だから何で目をそらすんですでしょう？

「どうかしました？」

「いや、カミーユはあれで「第三位だ」カミーユ、もう歩いて平気なのか？」

「まあな。マクシミリアン、俺はお前を認めてやるよ」

「ありがとうございます。というかカミーユさんで第三位って本当なんですか？」

「本当だよ」

あの、どんだけ第一位強いんでしょうか。

「第一位は一人で残りの五本指を二人までなら潰せる。ついでに第一位はネフテス所属だ」

死亡フラグ立ちました……………

「ネフテス所属は第一位・第二位・第五位だ」

死にましたね、第二位まで付いてくる特典じゃないですか。そんなサービスいららないんですけど。

「安心しろ。お前の戦闘方法は多対一か多対多の戦闘に向いている。俺一人とやりあうより楽なはずだ。多分」

「多分って言いましたよ今、多分って……つまり死ぬと……心配するな、五本指以外は月影の面々で潰せる。五本指をお前ら二人でどうにかすればいいんだ」

「いや、それがきついんですって。それに、

「何も全面衝突前提で考えなくてもいいじゃないですか」

「あ、それもそうだ」

駄目だこの人たち、さっき絶対にどうやってネフテス潰すか考えていましたよ。

とりあえず僕は体を治すことを考えますかね。杖は……あれ？懐に杖が無い。

「ミハエルさん、杖知らないですか？」

「すまん返すの忘れてた」

ひどい、返してほしかった。さっさと……

「ほい、杖だ」

「ありがとうございます」

さて、あとは体を治しましょう。

ミハエルは現在村の会議室に月影の全メンバーを集めていた。

「おいお前ら、もしかしたらネフテスと全面衝突になるかもしれない。お前らは付いてくるか？」

「当たり前だ族長」「あの蛮族の少年、マクシミアン君だよね」

「そうよ」「あの少年かつこよかったし付いて行くわ」「同じく」

「マクシミアンのために付いてく」「族長とカミーユが認めただよ。ついてくが決まってるだろ」「来たときにさりげなく魔法を使ったけど嘘ついてなかったしな」「え、お前使ってたの！」「お

お

「静かにしろ」

騒がしかった会議室はミハエルの一声で静かになる。

「遊びに行くんじゃない。下手すればこの中の誰かが死ぬかもしれない。それでも来るか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「死ぬ」その言葉を受け、月影の面々は静かになる。戦闘部族である彼等は温厚なエルフの中では戦闘の回数が圧倒的に多い。他の部族が手を焼かされている龍の対処などを引き受けるからだ。そして、その分、『死』というものに直面することが多い。たとえどんなに強くても生き物なのだ。死んでしまうときは死んでしまう。だからその分『死』を深く受け止める。彼等にとって『死』は最も避けるものと言われている。死んでしまえばそれでおしまい。だから死なないように強くなるうとする。そして、今、ついて行けば死ぬ可能性がある、と言われている。ためらいが発生するのは当たり前と言える。各々がそのことを受け止め、静寂が続いている。それを突き破るものは、こういうときに一人や二人いるものだ。そしてこの中にも勿論いる。

「お前ら、本当にマクシミリアンを受け入れたのか？俺にはまったくそうは見えねえ。『死』は確かに恐れるべきものだ。だがな、時には命をかける必要だってあるんだよ。俺は行くぜ。あいつに俺は付いて行く。たとえばお前らが来なくてもな」

「カミーユ・・・・・・・・」

「じゃあな、俺はマクシミリアンのところに行く。あいつはもうしばらく休む必要があるからな。俺はあいつが此処を出るときに最初にあいつのところに行けるように傍に居ることにする。お前らは来なくてもいいぜ」

「さて、カミーユ」

ミハエルの呼びとめる声も聞かず、カミーユは飛び出した。

開戦前夜（後書き）

オリジナル魔法、もう少し募集します。

対ネフテス戦、開戦

明日にはここを出ましよう。たとえ月影の皆さんが付いて来てくれなかったとしても交渉なんですから戦う必要はないですね。

「邪魔するぜ」

「カミーユさん、夜遅くにどうしたんですか？」

まったく何で来たんでしょう。来てくれるのは嬉しいんですけど。他の人たちに変な目で見られたりするんじゃないですかね。というより今は寝たいんですけど、明日ちよつと早めに出るためにも。

「眠たそうな目で見るな、なんか来た俺の心に罪悪感が発生する」

勝手に発生させていて下さいよ。体は7歳なので眠いんですよ・・・

・

「お前は明日の朝出るつもりだろ」

ありゃ、ばれてましたか・・・

「ええそうですよ」

「俺も此処で寝る」

「はっ？」

まさかホモ？

「てめえ、今失礼なこと考えていただろ」

バカな、心が読まれた・・・というか額に青筋を浮かべないでほしいんですよ。とても怖いんですよ。

「まあいい、もしかしたら二人で乗り込むことになるかもしれないから覚悟しとけ」

「もとは一人で乗り込むことも覚悟していましたから」

「そうか」

「さあ、明日は早いですよ」

「そうだな」

今日は早く寝て休まないといけませんね。下手すれば大喧嘩になるんですよね、どうやって勝ちにいきましょう・・・原作のビダー

シャルとか出てくるんでしょうね・・・僕が思うにビダーシャルはルイズの解除の魔法があったからあっさり逃げましたけど実際は強いと思うんですよ。

さてさて、寝てしまうと時は一瞬で過ぎてしまいます。既に朝です。ネフテスの方々とどうやって話をつけるか、そこが問題ですね。たとえエルフが温厚な性格でも蛮族と称して敵意丸出しの種族に対して貿易、および交流をしてくれませんか。

そう言えばカミーユさんこの部屋で寝ているはずですけどどこで寝ているんでしょう？

・・・昨日こんなソファアありましたっけ？オレンジ色のソファアなんて・・・あつたら絶対に目についてますからね。もしや・・・

「ディテクトマジック」

調査のためにあると言っても過言でもない魔法をソファアに掛けます・・・何この反応。中に・・・エルフ？まさかカミーユさんって狭いところが好きとか、ミイラみたいになりたいとか変な性癖の持ち主？

と、取りあえずソファアの中への入り口？を開けてみましょう。

ガコンッ

「カミーユさあ・ん？」

何ででしょう。ゴシゴシ・・・思わず目をこすってみましたが見間違いじゃないようです。ソファアの中に部屋があります。小さな人形を置くようなものじゃなくて普通に生活できる部屋が・・・おかしいですね、ソファアの中にこんな部屋があるわけないじゃないですか・・・机に椅子にベッドまであるんですけど

「マクシミリアン、起きてたのかよ。くそっ、もっと早く出発出来

たのかよ・・・ちつ、まあいい、準備はいいか？」

あれ？カミーユさんどこ？いないのに声が聞こえる・・・

「あ、もしかしてこのマジックアイテム知らねえか。入ってこい」

え？畏みたくない感じがするんですけど・・・

「早く入ってこい」

怖い、とても怖いです。でも入らなくても身の危険はあるようです。なら入った方がいい気がします。

「お邪魔します」

入口から入る（座るところから落ちる）と椅子に座っているカミーユさんが現れた？突如として椅子に座っているカミーユさんが見えるようになりました。

「何ですかこれ？」

「これはマジックアイテムだ。中は部屋があるんだが見た目ではただのソファー。んで中に入らないと中の生き物は見えない。だからお前は中から俺の声だけが聞こえて姿が見えない状態におちいったわけだ。理解したか？」

「はい・・・」

エルフ、とんでもないものまで作っているんですね。これいろんなことに使えますよ。かくれんぼとかかくれんぼとかかくれんぼとか・・・はいごめんなさい。かくれんぼにしか使えません。

「まあいい、俺を探してたってことはもう行けるんだろ？」

「ええ、行きますよ」

この数分後、月影の村を僕とカミーユさんは出た。

「ネフテスについての話だな」

「？急にどうしたんです」

道中急にこんなことをきりだされました。まさか急にネフテスについての話をして下さるとは思いませんでしたよ。ただの戦闘狂かと

思っていたんですが意外とやさしいようです、カミーユさんは・・・

「お前、毎回俺に対して失礼なこと考えてないか」

「そんなことないですよ（なんで心が読めるんですか）」
「これじゃ録に考え事だつてできないじゃないですか。」

「ちつ、まあいい。ネフテスには6000年前。つまりお前らの言う始祖ブリミルだったか？それがいたところにな、大規模魔法が掛けられたんだよ」

「はあ」

ブリミルが掛けたと言つつもりですかね。なかなか厳しいと思うんですけど。証拠無いし。

「その魔法でな、エルフト、認められている奴以外ネフテスがどこにあるのか分からないんだよ」

「は？」

認識阻害の魔法？それとも幻影を発生させている？地下にあるから分からないとか・・・モグラ？

「お前、エルフ全体に対して失礼なこと考えていただろ」

「そんなことないですよ（だから何で分かるんですか・・・）」

「・・・怪しい・・・取りあえず認識阻害って考えてくれりゃいいんだけどな。蜃気楼だったか、取りあえずそれをネフテスに掛けていてな。その影響でどこにあるのかが分からないんだよ」

「じゃあ、なんでエルフには分かるんですか？」

「知らねえよ。そういう魔法なんだよ」

なんて目茶苦茶な、ネフテスの人たちにどうやっているのか聞いてみることにしましょう。

「さてそろそろだ」

「え、蜃気楼なんてありませんでしたよね？」

「俺達月影がお前を認めた時点でエルフに認められた奴ってことになつてるんだよ」

本当にどういう原理なんでしょうか。とても知りたいです。教えてくれるまで粘りましょう。交渉が失敗してもそれだけでも聞いて帰りますよ。

「じゃあ、もう少しゆっくり歩いてください。罨仕掛けながら行きますので」

「……お前も戦闘考えてるんじゃないか」

「最悪な状況も考えなきゃ『いざ』というときに危ないですからね」

「そりゃそうだが」

さて、モグラ叩き＋ 大作戦とでも言いましょうか。ネフテスのみなさんにはちよつと悪いですけどね。

さりげなく罨は掛けさせていただきますよ、ククククク……

何かどす黒いオーラがマクシミリアンから流れてきているんだが。

ネフテスよ、冥福を祈ってやる。

きらんっ

その時流れ星が流れたのは気のせいだと願いたかった。

「敵さんのお出ましのようだぜ」
ネフテス

「もう来ましたか。それとカミーユさん。ネフテスは敵じゃないですよ」

「敵みたいなものだ」

カミーユさんってホントに大雑把だ。こういう性格の人の部屋って汚いはずなんですがね。何でソファの中の部屋がきれいだったんでしょう……

「蛮族を連れて何の用だカミーユ」

「どうもねえよビダーシャル。ただこいつがネフテスに行きたいって言ったから連れてきただけだ」

ビダーシャル登場……ああ、嫌だ。反射が得意な人と戦うとひど

いことになる気がする。

「（カミーユさん、戦闘はいいですけど、ここにできる限りてk・
・ネフテスの方々を引きつけますよ）」

「（今絶対に敵って言いかけたたるおい。自分で敵じゃないって言
つといてそれかよ。つとまあ、今はそれどころじゃないんだつたな。
畏にはめると言うことなんだろ。できる限り協力する）」

「何を話しているのかは「分かってしまふのだよ」さっさとここか
ら「入ってくれたまえ」。「統領」が「楽しみにしていたのだ」。
ここから「入れば」お前の「望みをかなえてやろう」

「本当ですか？」

あ、やりすぎたのかな・・・？ビダーシャルの額に青筋が浮かんでる
んですけど・・・口がパクパクしていて餌を待つ金魚みたいで
すけど・・・

「ば・ん・ぞ・く・よ・その命余程要らんと見える」

え、そんなわけないじゃないですか。命は大事に。が motto なん
ですから。

「いや、さすがに要らないようにみえた」

「えっ」

まさか、カミーユさんにまでそう見られるなんて。ただちよつと
ある二次の主人公
偉大なる先輩を真似ただけです。それは偉大なる先輩方に失礼じ
やないですか。

「「なんだか分からないがお前が凄い失礼な奴に見えてきた」」

「そんな馬鹿な」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

まさか敵であるビダーシャルにまで頭を抱えられるなんて・・・
あ、でもこの間に入ってしまえばいいじゃないですか。すぐ50メ
イルぐらい先にネフテスがあるんですから。

「入らせるわけ無かるう」

「わっ」

・・・・・・・・・・何でしょうか・・・これは・・・目の前に深い谷が

できているんですが……雇気楼が作用している？いや、それはないでしょう。雇気楼は認められていれればいいみたいですから。月影の方々が僕を認めている以上僕には作用しないはずですよ。これは雇気楼じゃないでしょう。だとしたら、ビダーシャルの仕業？まさか魔法一発でここまで深い谷は……きつと罫を仕掛けていたんでしょう……

「いいことを教えてやる。私はエルフの戦闘に関しての長だ。どうせその裏切り者から聞いているのだろう。五本指といわれている存在があると。つまりその第一位だ」

「……ビダーシャルって強いのでは？と考えていましたがそこまでですか……さすがにいきなり第一位が来るとは思っていなかったですね。戦いながら第一位対策の罫を仕掛ける予定でしたから、さすがにまずいですね……」

「まあ、私が戦うまでもあるまい。カミュー第三位がいるとはいえ、ネフテスの力を見くびるなよ。殺れ」

「……………はっ……………」

「ここまで二人相手にエルフ兵を出してきますか。最低でも3000いそうですが……」

「話し合いをしに来たんですがね。いいですよ。あなた方を潰して統領さんと話し合いに持ち込んで見せますよ」

対ネフテス戦、開戦（後書き）

オリジナル魔法、もう少し募集します。

系統魔法だけじゃなくて、先住魔法も考えていただけるとありがたいです。

まででカミーユさんが使っていたでしょうし。僕？某ネコ型ロボットのようにならなければならぬ。ばれないように足を動かしていましたが……

はい、これでエルフはビダーシャル以外戦闘不能です。

「ビダーシャルさん、これ見てもまだやりますか？」

「ふん、関係ない。お前ら、穴の中に居ないでさっさと出て来い」

あ、多分無理でしょうね……罨の中に罨を仕掛けていますから……

「……（反応が無い、まるで屍のようだ）」

「おい、何をやっている、早く出て来い、ただの落とし穴だろうが」

「……（反応が無いまるで屍のようだ）」

「蛮族よ、何をやった」

聞いてくれるのを待っていましたよ、これを説明したくてしよがなかつたんです。こんなにきれいに罨にかかってくれたんですからお礼の意味を含めて……

「落とし穴の中にスリープクラウドを充満させておきました、だから落ちた人はみんな寝ていますよ。それと穴の入口にA・Tフィールド、つまりエアシールドの強化版みたいなものを穴に人が落ちなくなったら掛かるように仕掛けておきましたから、そこからいくら叫んでも聞こえませんし、上で戦闘をしても流れ弾が行かないです。それにスリープクラウドが出ていくことも防げます」

「……いいもの仕掛けられましたよ、エルフ3000人以上を一瞬で無力化。過去にこんなことした人いないんじゃないですかね？うん、結構凄いことをやった気がします。」

「仕方があるまい」

「何がですか？穴に落ちたことですかね、それなら確かに過ぎ去ってしまったことですので仕方がないと言えますが……」

「ルクシャナ、手伝え」

ええ……ルクシャナって誰？原作に出た？（注、マクシミリアンは15巻までしか読んでいない設定となっておりますのでご注意ください。なお、ルクシャナはそれ以降に出ます）

本気で誰って感じなんですけど……

「カミーユさん、ルクシャナって誰です？」

なんかカミーユさんが苦笑いしていて嫌な予感しかしないんですけど、取りあえず聞いておきましょう。まったく知らないよりも少しでも知っていたほうがいいですから……

「第二位さ……」

はて……今何と言いました、カミーユさん……第二位って言いませんでしたか？それって五本指の第二位だとも言うべきですかねえ……何でそんなに戦力を投入するんでしょう。そこまで強い存在だとは思っていませんよ自分が。

「アリーも見ていないで来い」

あれ、また一人追加ですか？ルクシャナって人が来る時点で過剰戦力だと思えますよ。んで

「アリーって誰です？」

まあだいたい想像付きますけどね、五本指が3人ネフテスにいるんですからね、今二人出てきましたから残りの一人ですよねどうせ

「第五位だ」

五本指三人vs五本指一人&僕ってヤバいんじゃないですかね。さすがにこれは厳しいですよ……

あれ？まだ呼ばれた二人出てきませんね、もう出てきておかしくなつ……

「ちっ、かわしたか。まあいいだろう。アリーだ。鼠と裏切り者よ」

「今のアリーの攻撃かわしたのは凄かったよ。不意打ちだったしね。なんか倒さないといけないみたいだけど、話を聞きたいから殺しはしないよ。今の人間達のこと教えてね。私はルクシャナだよ」

いきなりエアカッターみたいなのが飛んで来たと思っただけで来たよ……不意打ちとは結構ひどいですねえ。今、あとちょっと反応が遅かったら首が飛んでましたよ。

「マクシミリアン、第五位は俺が潰す、第二位と第一位は任せた」
「えっちよっ待っ」

行ってしまいましたか。カミーユさんなら心配はいらないでしょうがさすがにこつちがきついですよ。第一位と第二位、まとめて相手をしなくちゃいけませんからねえ。生きて帰れるといいです。

「ふっん行っちゃったか、カミーユと戦りたかったんだけどな。まあいいや、伯父ちゃんやアリーの君を殺す心配は私が戦えば無くなるしね、伯父ちゃん、私がこの子もらうよ。話聞きたいし」

「お前一人でやるのは無しだ」

とか言いながら魔法放ってくるのはやめてほしいんですけど。一発一発が威力高いし、スピードも速いし……チート以上ですよこれ。
「ユビキタス、風は偏在する」

偏在が99体、本体を含めれば100体現れ、「ナイツ」、それぞれが炎の騎士団を100人召喚する。「騎乗、突撃」下から現れた炎の馬に乗り、ビダーシャルとルクシャナに突撃していく。そして恒例のコンボで、「ティロフィナーレ」巨大なマスケットのような銃を本体とすべての偏在、合計100人のマクシミリアンが、持ち引き金を引く。銃口から放たれた地獄の業火のような銃弾は、ナイツを巻き込み、威力を上げながら、ビダーシャルとルクシャナに直撃する。

「これでどうですか」

さすがにこれが直撃したんですからダメージを喰らっているでしょう。カミーユさんだって半分の数喰らったときにダメージを受けたんですから。

「いい攻撃だ。だが私には効かん」

「さすがに痛かったよ。もう」

煙が晴れた時に見えたのは無傷のビダーシャルと少し傷のあるルク

シャナだった。

眠りの穴（後書き）

オリジナル魔法、アイディア募集中です。

攻撃の直撃

「……何で効いてないんですかね。結構本気で撃ち込んだはずですが」

あれだけの集中砲火を浴び解いて平気なはずがないんですけどねえ。ですがビダーシャルは無傷、ルクシヤナは軽傷って感じですからね。本気である程度の攻撃が効かないって感じなんでしょうか……。「それはね、それなりにダメージ喰らったんだけど治しちゃっ痛っ、なにをするの」

「普通に情報を教えているんじゃない」

ああ、ヒーリングみたいな魔法で傷を治したんですか。じゃあなんでもとりあえず分かったことはまったくダメージを受けていないわけじゃない。ということですね。治療の速度がビダーシャルのほうが早く、傷も少なかったと考えるとあまりまずねでもない。治療の速度がビダーシャルのほうがいい。ということですね。

地道にダメージを与えていけば治療が追い付かなくなり、勝てるでしょうが……まあ、それしか手はなさそうですから頑張るしかないようですね。

「蛮族よ、お前に勝ち目はないぞ」

「大怪我しちゃうと話を聞けないから困るんだ。降伏してくれない？」

確かにこっちの攻撃はなかなか効きそうにないですが、彼等も一つ忘れていきますね。

「あなた方の攻撃が当たるのであればそうかもしれませんが、今のところ僕は一発も攻撃を受けてないんですよ」

A・Tフィールドでライトニング系のような魔法は防ぎましたし、アリーという方の不意打ちもかわしました。彼等から放たれた攻撃は二発で少ないですがどちらも殺傷能力のある攻撃でした。それ

を両方ともかすりもしていませんからねえ。こっちが大怪我を負うということに信憑性はまったくないんですよ。

「確かにお前は俺の本気で放った攻撃を防いだ、だが2対1だ。お互いの攻撃が効かないのだから消耗戦となり、1人だけのお前が負ける。分かりきったことだ」

確かに消耗戦になったら不利ですね。ある程度使うとめまいが来ますし。だったらさっさと潰せばいいんじゃないんですかね。大出力の魔法を連発させて。まあ、そんなに大出力な魔法は使いませんよ。「やってみなくちゃ分かんないですよ。ウインディアイシクル・アイシクルジャベリン」

「やはりお前は詠唱なしで魔法を放っていたか。まあ、どんなに早く魔法を放とうが効かなければ意味はないだろう」

確かに効かなければ意味はないですね。ですが効かない理由が『反射』なんですよ。反射に対しての仮説があるんですよ。もしこの反射がベクトルを逆にして跳ね返しているものだったとしたら、某学園都市の白髪第一位と同じ攻撃を喰らうんですよ。当たる直前に引き戻すという攻撃方法に変えればもろに喰らいます。

マクシミリアンから放たれた氷の矢と氷の槍は、反射の圏内に入る瞬間に引き戻され、『反射』の効果によってベクトルが逆になり、『ぐっ』ビダーシャルを貫いた。

「伯父ちゃん！？何で、今のはさっきの攻撃と違って反射を越えることができるような攻撃じゃなかったのに」

「簡単な話ですよ、反射の圏内に入った瞬間に氷の矢と氷の槍を引き戻しました。『反射』の能力はベクトル方向を変える魔法なんですよ。こちら側に戻してやることによってその戻ってくるというベクトルが逆の向きに変えられて、攻撃が当たる方向に変えられるんですよ。つまり自らの反射の効果によって攻撃を喰らうんですよ」

「そんなんっ」

嘘は付いていませんよ。某学園の方々と同じ原理だったことが駄目だった点ですかね。もしそうじゃなくて内から外へ強制的に吐き出

すような魔法だったら大出力の魔法を連発する必要がありましたけどね。

「くっ、治療より怪我のほうがひどいな。さすがにこれでは不利か。ユビキタス」

偏在！まずいですね。いくら防げるとは言ってもさすがに・・・偏在が使えるとは思っていませんでしたよ。

「炎砲」

「なっ」

既に攻撃を仕掛けてこないと判断していたルクシヤナから、炎の銃弾が、くっ、凄く小さいから弱さに見えますが、圧縮しているだけで高威力の魔法ですね。ここは・・・

マクシミリアンは横に転がりかわすが、そこにビダールシャルの偏在の一人が風の砲弾で追撃する。「エアシールド」しかしそれは、風の壁によって阻まれる。さらに、別の偏在が、ライトニング系の魔法を連発させ、追いつめるも、「A・Tフィールド」強力な風と高水圧の壁に阻まれる。ビダールシャル本体が赤い塊を投げ込み、偏在とルクシヤナはマクシミリアンから離れる。マクシミリアンが何か分らずその場に立ったままだいると、赤い塊が爆発した。

「精霊の力の凝縮された火石だ。やつもこれで生きてはいられない」「やり過ぎな気がしないでもないけどこうでもしなくちゃこっちが危なかったね」

火石が爆発した後はいまだ燃えたままだった。

攻撃の直撃（後書き）

まだまだ先のことなのですがヒロイン誰にしましょうか。決まっていらないんですよ。取りあえず自分の中でオリキャラ（性別・女）を一人組み込む予定なんですけど……

キュルケ

タバサ

イザベラ

オリキャラ

その他

前に書いた内の何名か

どれがいいですかね。その意見がある程度考慮したいと思います。投票という形で手伝ってくださると嬉しいです。

祝PV累計10万アクセス突破のお礼と、今後登場させる予定のオリキャラの設

作「嬉しいことにpvで累計10万アクセスを突破していました」
マ「本当ですか」

作「本当です。というわけで、今回は、パーティーです」

マ「して、ゲストは・・・？」

作「こちらの方です」

作者が指さす先には・・・黒いサングラス、黒いスーツを身につけ、お昼の時間帯にレギュラー番組を持つ男、その名も・・・
作「タモ」ぎゃああああああああああああ

マ「この二次にまったく関係のない人をゲストに迎えてどうするんですか」

現在作者は、マックスにより赤黒いボロ雑巾となっております。復活するまでしばしお待ちください・・・

ところ変わって取調室

作「お昼の番組の中で今日のゲストはこの方です。どうぞ。って感じな言葉良く言っていた気がして・・・」

マ「それでゲストを迎える側じゃなくてゲストとしてくる場面を見なかったと・・・」

作「間違えありません」

マ「容疑を認めましたね。まあいいでしょう。今回はこの程度にしておいてあげます」

作「ありがとうございます。マックスばぶおっ」

作者がマックスの放ったファイアーボールに焼かれ、焼き魚のようになつております、復活するまでしばしお待ちください・・・

・・・

マ「そろそろ真面目にやりましょうか」

作「そうですね、ということでの二次を読んで下さったいる皆様
に心から感謝させていただきます」

マ「ダメな作者が書いているこの二次ですが未永く、温かい目で見
守って下さい」

作「じゃあ、飲んで食べて騒ぎましょう」

マ「作者、未成年者は飲んじゃ駄目なんですよ……………」

作「なぜ酒だと分かった！」

マ「ふざけ過ぎているからですよ。ここまでくれば何が言いたいか
は分かります」

作「ところでマックス」

マ「何でしょう？」

作「お前、前世何歳で死んだんだ？」

マ「14歳です」

作「早く死んだんだね。ほら、他の二次読んでみると高校生で死ん
だ人や大学生、あと、社会人で転生した人がほとんどなんだよね」

マ「そうなんですか……………もうちょっとゼロの使い魔読んでか
ら転生したかったですね」

作「というと？」

マ「15巻までしか読んでないんで原作知識がそれ以降の分無いん
ですよ」

作「大丈夫、僕もそれ以降は店頭で立ち読みした程度だから」

マ「(駄目だこの作者……………それ以降の設定とかどうするん
でしょう)」

作「それ以降の知識は他の二次とwikiで知ったから大丈夫」
マ「ホントでしょうね」

作「ホントダヨ、ホント。アハハハハ（汗）」

マ「絶対に大丈夫じゃなさそうです。もうこのさい諦めます。今度はこつちから質問しますよ」

作「どんと来い」

マ「前回のあとがきで書いたオリキャラ、どんな人の予定なんですか？」

作「えーと、銀髪の発育が遅れている体型で」

マ「某科学都市のシスターさん？でもそれじゃあ、オリキャラじゃないですね」

作「片目に眼帯掛けていて、出している方の目は赤色で」

マ「IS？ISのラウラ・ボーデヴィツヒ？それ以外そんな特徴的な格好なキャラ僕は知らないよ」

作「・・・にそっくりで、眼帯をしていなくて」

マ「眼帯はすただけじゃ同じことじゃないですかね」

作「両目が赤」

マ「少し変わった」

作「の、マックスと同じ所から来た転生者。ゼロの使い魔の世界に送られるときに、神に容姿はラウラ・ボーデヴィツヒにして言ったら、あのまんまの容姿は駄目じゃ、と言われて少し変えられて送られてきた設定だよ」

マ「もう何も言わない。性格は？」

作「幼少く学園入学までラウラのまねをしていたせいで、口調も性格もほぼ一緒」

マ「なるほど」

作「ホントは僕がシャルロット派だからシャルロットが良かったけどガリア王家のタバサとかぶるし、ゲルマニア出身にするにはドイツ人じゃなきゃだめだし、ということから、ドイツ出身で僕の好きなキャラ、ラウラになったーっわけです」

マ「そこで設定理由言っちゃうかな・・・・・・・・・・」
作「気にするな。気にしたら禿げるぞ」
マ「理不尽じゃない？」
作「細かいことを気にすると禿げるぞ」
マ「めっちゃくちゃだ」

作「キュルケ

タバサ

イザベラ

オリキャラ

その他

上記の複数

ヒロインを決めるときに結果を含めて思慮するので、誰がいいか投票という形で手伝ってください。

現在、タバサ 1票

イザベラ 1票

となっております。

その他の場合は、そのキャラの名前を書いてください。

以上、作者からのアンケートのご協力のお願いと、その内容でした」

久々の面談

「さすがに今のは危なかつたですよ。まったく・・・コアを持ったとある生命体は人造人間にN2爆雷だかを突き付けられていましたけど、今、それとほとんど同じような状況でしたよ。とある生命体は僕で、人造人間がビダーシャル、N2爆雷が火石って感じで・・・」

「未だに燃え続けている、炎の中からマックスの声が響いた。」

「バカな、確実に火石の爆発はお前を巻き込んでいたはずだ」

「ビダーシャルが投げた火石の位置から1メートルも離れていなかった場所に、マックスは、爆発する前まで立っていた。確実に爆発に呑み込まれる位置であつた。」

「A・Tフィールドを使いました。防ぎきれるかどうか怪しかったですけど、これしか手はありませんでしたし。さすがに無傷とはいきませんでしたよ。ウィンド」

「未だに燃え盛っていた炎は、内側からの強風により、吹き飛ばされ、中からは、左の頬に切り傷を、左腕に火傷を負ったマクシミリアンが現れた。」

「くっ、ルクシャナ！」

「分かつてるよ」

「ビダーシャル本体を含め、3人と、ルクシャナは同時に火石を再びマクシミリアンに投げる。」

「つつ、さすがに4個同時は・・・」

「ズガガガアアアア」

「火石四個はマクシミリアンの傍で、同時に爆発した。」

「これで、どうだ・・・」

「話は聞きたいけど、命の方が、大事なの」

「4個の火石が爆発した場所は、今度こそ、何も言わなくなつた。」

「大丈夫かの？」

マクシミリアンは、目が覚めると見たことのある気がする泉の近くに倒れていた。

「神様ですか？」

「うむ」

「どうやら、死んだっぽいですね。それ以外でまた神様に会えるわけではないですから。」

「お主は、死んでなどおらんぞ」

心の中を読まないで下さい。って今、僕は死んでないって言いましたよね！

「うむ、お主に用があつての、あの爆発がちょうどいい感じにお主を隠したからの、こっちに呼び出すのに、ちょうど良かったのじゃ。つまり、お主は先程の爆発を受け取らんから死んでなどおらん」

「なんの用があつたんですか……」

「お主、自分がある程度魔法を使うとめまいが起ること気付いておるかの？」

ええ、チート能力の反動か何かだと思つていたんですが、違つたのですか？

「実は言つとな、お前をその世界に送るときにな、他の神に邪魔されての、その邪魔した神がお前が魔法を一定使うとめまいが起るようにしたのじゃよ」

「なんて迷惑な神なんですか……で今回の呼び出しはそれの解除ですか？」

「その通りじゃ」

「それじゃ早めにお願ひします。体が冷える前にビダーシャル達のところに戻らないと。体が冷えると、温かい時と比べて動きがわるい気がしますし……」

「よいじゃろつて、しばし目をつぶっておれ」
はい

なんか体に温かい物が流れ込んできたかんじです。なんででしょうか？もしかしてこれで、めまいになる原因を消しているのでしょうか？

「終わったぞい。もう目を開けてよいぞ」

ありがとうございます。

「それと、」

どうしましたか？何か問題が？

「お主、男なのに黒髪で、ポニーテールはないぞい」

別にいいじゃないですか、どんな髪型にしていたって……

「まあよいがな。それと、そのポニーテールについてじゃがどうしましたか？」

「ここに連れて来るときに僅かじゃが火を受けたようだな、少し焦げておるぞ」

ふふふ、そうですか。ビダーシャル、おしおきTimeですよ。ふふふ。

なっ、なんじゃ、マクシミリアンから感じるこの黒いオーラは、悪寒がするぞい。

「で、ではもう戻すぞい」

ええ、お願いしますよ。

「また用があったら呼び出すからの」

マクシミリアンは、足元に出来た黒いあなから、戻って行った。

久々の面談（後書き）

ある方から、主人公と、キュルケでは、上手く噛み合わないのでは？というような意見を頂きました。そこから、色々考えて、キュルケはヒロイン候補から外そうと思います。キュルケに入れてくれた方々、申し訳ありません。

ヒロインはイザベラとタバサにしようと思います。

投票に付き合って下さった皆様。ありがとうございました。

魔力解放

マクシミリアンは炎の中に立っていた。

「どうやら戻って来たようですね。神も相変わらずですね、紐無しバ
ンジーでこの世界に送るところは。んで、髪の毛はどれくら
い燃えたんでしょうか？ちょっと確認してみましよう。」

「……
……いい度胸じゃないですか。人が頑張って手入れして枝毛を無くして
いた毛先5センチを灰にするとはねえ。」

「いい度胸じゃないですか、ビダーシャル。髪の毛燃えましたよ」
マクシミリアンの声は怒りのせいか、少し震えていた。

「ば、バカな。髪の毛だけだよ！」

ビダーシャルは、沈黙していたはずの炎の中から、声が聞こえてき
た。という事実と、髪の毛を燃やしただけ、ということに対して、
恐怖を感じていたが、髪の毛を燃やされたことに対しての、怒りが
大きいマクシミリアンはまったく気付いていなかった。

「精神力の限定も、解除されたことですし、全力でビダーシャル、
あなたをぶっ飛ばさせていただきますよ」

「これまで、全力じゃなかったということか？」

ビダーシャルの頭のなかでは、ひとつの事実に気がきつつあった。
だが、どうしても、『それ』を認めることができず、マクシミリア
ンに、自分の仮説の答えを求めろ。

「故意に全力を出さないようにしていた訳ではないですよ。ただ、
とある方のイタズラで全力が出ないようにされていたようです。正
確には、これまでも全力で戦えない訳ではなかったんですけど、め
まいが起きて立っていられなくなっちゃいました。けど、さつきそ
れが解除されました。だから、ビダーシャル、あなたと全力で戦え
る。ユビキタス、風は偏在する」マクシミリアンのいつまでも枯渇
しないような、膨大な精神力から、顕現した偏在の数は、本体を含

め200人だった。

魔力解放（後書き）

旅行先から投稿しているので携帯からの投稿です。慣れない携帯なので、短いです。

オリジナル魔法。まだ募集しています。

真実

一人の偏在が、ブレイドを使い、ビダーシャルに斬り掛かる。・・・
・・・が、風の刃に切り裂かれ、消滅する。風の刃は切り裂かれた偏在の後ろに隠れ、直後に斬り掛かろうとしていたもう一人の偏在までをも切り裂き、消滅させた。その間に、5・6人の偏在が鉄のゴーレム？を造り出す。造り出された鉄のゴーレムは、高さが3メートルぐらいで、下半身が無く、上半身は4つの車輪の付いた、板の上にくっついているような感じだった。そして、左腕には、大きな盾が付いており、右手は、太刀を握っている。それらは、盾を構えながらビダーシャルに突撃していき、風の塊に叩かれ、崩れ・・・
・・・去らずに、爆発する。鉄のゴーレムの中身は爆薬で、出来ており、その爆薬は、火打ち石で包まれていたためである。ゴーレムの爆発は、ビダーシャルに襲いかかった。

炎が消え去った後に立っていたビダーシャルは、服が焼け、生々しい傷を見せていた。

「つつ、貴様」

「まだ終わりませんよ」

全てのマクシミリアンが同時に杖を振り・・・

『ウインディアイシクル』

数えるのは不可能な数の氷の矢が襲い掛かり、反射されずに突き刺さる。それは、細かいコントロールを行って当たったものではなく、

単純に力で圧倒した物だった。

「ぐっ」

『ライトニングクラウド』

氷の矢に続いて、電撃が飛び、ビダーシャルの体の自由を奪った。

ビダーシャルの体には限界が訪れ、前に倒れた。

「殺せ、私の命などどうだっていい。ネフテスには攻撃するな。あそこには子供達も暮らしている」

ビダーシャルはマクシミリアンをにらみ、言う。

「？なぜ僕がネフテスを攻撃するんですか？」

「侵略に来たんだらう。カミーユを連れて来た時からお前の魂胆は分かっていた。カミーユは中央であるここ、ネフテスを恨んでいるからな。カミーユという戦力を仲間につけて自分の力と一緒に戦力に数えて蛮族にとって敵の本拠地であるここを潰しに来たのだらう。だがここには何も知らぬ子供もいる。ネルフにとって最高戦力である私の命で許してくれまいか」

「……………？なんか勘違いされていますよね。べつにネフテスを落とすに来たわけじゃないんですけど。」

「伯父ちゃん！やらせないよ。私が守るから」

あれ……………思いつきりルクシヤナさんまで戦闘態勢に入っちゃいましたね。この状況どうしましょう。

「おい、マクシミリアン。こっちは終わったぞ。手伝うか？」

アリューさんを気絶させ、抱えているカミーユさんが僕の少し後ろにフツと現れます。

「いえ、それになんかビダーシャルさんになんか勘違いされているんですが……………」

「ん？どうした」

「侵略しに来たと思われています」

「ぶっ、ふはははははは、そりゃ傑作だ。いいこと教えてやるよビダーシャル。こいつは侵略なんて物騒なことしに来たんじゃねえ、俺達エルフと友好的な関係を築きたいんだとよ。俺はこいつの強

さに惚れた。だから復讐しに来たわけじゃねえ。安心しな」

「「なっ！」」

意識のあつたビダーシャルとルクシヤナは開いた口がふさがらなかつた。

異種族交渉

「申し訳なかった」

「……すみませんでした」「……」

「……カオスです……まあ、まず普通なら見れない光景が僕の目の前には広がっております。エルフの方々が、蛮人と称する人間に対して……頭を下げています。」

「ええ、はあ」

「ハハハハハハハハ」

カミーユさん、みなさん真面目なんですから僕の後ろで大笑いしないでくださいよ。まあ僕に対して攻撃的な気を抱いている人に牽制をしてきているのはありがたいんですけどね。」

「まあいいですよ。僕ら人間を嫌っていること分かっていますから。こんな感じの対応も想定していましたし。んでまあ、ビダーシヤルさんから聞いているかもしれないませんが僕はあなた方と仲良くないりたくて来ました」

「おお聞いておる。ワシはネフテス統領、テュリユークじゃ、以後よろしく頼む。それでどちらの考えを聞かせてくれんかの」

「ええ、僕としてはあなた方との貿易を行いたいです。ここいら一帯は砂漠。作物などを育てるのには向かない土地だと思えますが？」

「確かにそうじゃ。周囲の集落から分けてもらうことも多々ある」

「それを僕ら人間があなた方に貿易の品として持って来ましょう。それと人間内に虚無の担い手が現れたら報告します」

「破格じゃな……ではこちらからは？風石などかの？」

「いいえ、そちらはどうでもいいです」

「ならば何を求めると言うのじゃ？」

テュリユークさんの顔がちよつと困惑顔になりましたね。まあ普通はそうでしょう。でもまあ風石ってそこまで欲しいものですかね？陸軍の対空火器がそろっていればそこまで強くないと思うんですよ。」

空軍つて。ですから……

「エルフの技術を我々に指南してください。それと技術者などの派遣を行っていたけると嬉しいです。フェイステンジのかかったマジックアイテムなら僕は作れますから」

「……つまり、蛮ぞ、いや、失礼。お主らの中で我々エルフに生活しろということじゃな？」「申し訳ありませんがそういうことです。ですが今僕の家の中は僕の資材にて領民向けの学校を作り展開しています。その中にはエルフについての事項も書かれており、ブリミル教の矛盾点を書いた上で教えているのでエルフが歩いていても人間側が怖がることはだんだん減っていきます」

「そうか……その話受けよう。我々だけが得をしても礼儀がすたるからの。人選のほうはワシに任せておけ。それとカミーユ、出て行けというわけじゃないが、この物と一緒に行きたいのなら行ってもかまわんぞ」

「「ありがとうございます」」

僕はカミーユさんを連れて家への帰路に足を向けた。

海だ船だ

どうやって進むんだよ

「直接帰ろうと思うのですが？カミーユさんはそれだと何か不都合はありますか？」

「いや、ないぜ」

さて、どうしましょうね。ロマリアを経由するのは厳しいですからね、さすがに……。まあ、ロマリアの神官程度にばれてもカミーユさんと僕の武力で制圧できる気がするんですけどねえ……。船を作ってガリアの方まで行きましょう。来た時みたいに飛んでいければいいんですけどね、カミーユさんは超高度は飛べませんね。しょうがないですね。

「海渡りますよ」

「マジかよ、また海かよ」

ははははは……。ネフテスで海行つて来たばつかですもんね。まあこればつかしは変えるためにしょうがないことですからね。長距離の移動を行えばいいかもしれませんが帰るまでに力尽きるでしょうね。

ガリアで捕まったとしたら、まあしょうがないから魔法をぶつ放すということ……。まあ文句言っていないで、魔法の応用で船作るしかないんですか

「ら

「ほいほい」

錬金とかを多重に使用して船を作るのもめんどくさい仕事ですね、全く。

そこら辺にある土砂が次々に竜巻に巻き上げられていき、巻き上げられた先から金属へと変わり、カミーユが腕を振ると、ジグゾーパズルのように船の形を作っていく。そして、その上に近場に生えていた木を斬り、敷き詰める。その船に帆はなく、推進力を作ると思われるパーツは見当たらない。

「まあこんなものでしょう」

「おおおおい、この船でどうやって進むんだよ」

「え？簡単な話ですよ。マジックアイテムを使います。それと僕ら自身の魔法を使いますよ」

「？」

「いえ、なので……」

魔力推進器、僕らの風の魔法をコアに当てるということでそのコアから魔力を放出して推進力を作り、それで進むことが可能となる。

「……………なんてもの作つてんだよ」

「来るときだつて使つてましたよ？」

「何で疑問形！」

いやーフライで普通に飛んでフライだけで出せる限界速度を越えるための推進剤として使つただけなんですよね。だからこれの推進力としての能力の高さは分かっているんですけど……長時間使えるかどうか怪しいんですよ。まあこれが使えなくなつたとしても海上でまた作りだせばいいんですけどね。

「さあ行きますよおお」

「しゃーねーな」。んじゃ出港」

異形の船は蒼い海を二つに割るかという勢いで進みだした。

何気なく上を向いたマクシミリアンの眼には灰色の鈍い明りを持つ空が映っていた。

pVアクセス22万突破祝い。

本編にも関わりがあると思う？

作「いやーついに来ましたよ22万アクセス」

マ「嬉しいですけど何故22万で祝うんですか？普通は20万で祝いますよね、区切りいいですし」

作「うん、祝おうとしてたよ。んで何となくやりたくなったISの二次やったり、これの話更新したりしてたらすっかり忘れてて・・・」

マ「22万ですか・・・」

作「yes!」

マ「某車のCMみたいだ・・・」

作「まあそれはいいとして。んで自分の成長が読まれるってのはどんな感じなんだい？」

マ「背中の手が届かないところが痒いって感じですかね」

作「それはお辛いことで・・・」

カ「おい、マクシミリアン、そいつは誰だ。さっき急にお前の横に現れたと思ったらお前と仲良く喋り出したけどよお」

作「気分というか勢いで書いたISの二次が全然読んでもらえなくていじけているこの二次の作者です」

カ「殺つていいか？」

マ・作「ダメです」

カ「まあそいつはいいとして、変なのが出たぞ。タコみたいなの？」

マ「何で疑問形？」

作「そんなのこの二次の計画には無かったんですけど・・・」

カ・マ「イレギュラー？」

作「僕がここに居るのが原因だろうなああ~~~~」

マ「とりあえず倒して、今日の晩飯にしましょう」

作「乗りかかった船、まあ微力だけど僕も手伝うよ」

カ「お前 ふざけてるだろ」

作「ふざけてないよ」

巨大タコ？が現れた。

作者のターン

ペン はケンよりも強し。 作者は手に日本刀を装備した。

作者の攻撃 タコ のア シが斬れた。

マクシミリアンのターン

ウィンディアイシクル

タコは倒れた。

マクシミリアンは食材を手に入れた。

作「とまあおふざけはここまでとして、マクシミリアン」

マ「なんですか？」

作「お前は銃は使えるけど剣は使えないんじゃないかと思って」

マ「……………使えません」

作「だから稽古をするぞ。大丈夫、何かを教えたりするわけじゃないからと斬りあいするだけだから」

マ「それって軽くいじめ？」

作「普通に違うから。時間がないんだからさっさとブレイド使って行くぞ」

作者が日本刀を構え、爆発的な加速をし、マクシミリアンに冷たい刃は迫る。

「くっ、ブレイド」

ギリギリで展開が間に合ったブレイドで作者の刃を防ぐが、力で押され、マクシミリアンのほうに日本刀が迫る。

「あくまで実戦形式ということを忘れるなよ」

作者の左手に電撃が走るのがマクシミリアンから見え、その電撃の走った左手がマクシミリアンの水月に直撃し、その体を吹き飛ばす。「ぐはっ……」なんて魔法っぽい使えるんですか?!」

「ペンは剣よりも強いつてね、作者である僕が考えたものは実体化できるんだよ。ほら、まだ終わらないよ、気を抜くな」

作者の後ろに大量のナイフが顕現し、マクシミリアンに向け襲いかかる。

「なんて数、ユビキタ「偏在は使用禁止」なっ」

マクシミリアンが偏在を使用しようとした瞬間にその発動は作者によって禁止される。

「だったらA・Tフィールド」

全てのナイフは強力な盾であるA・Tフィールドに防がれるが、

「でりゃああああ」

作者の袈裟切りによってA・Tフィールドは真っ二つに斬れさらにそこから突きの連撃が放たれる。

「ちよっ」

マクシミリアンは全てをギリギリで防ぎながらも一つのことを感じる、まだ敵は本気を出していない。

なら、油断されている間に勝ちを取りに行く。

甘い突きを強く弾き、そこから前方へとブレイドを突き出す。

ブレイドは作者に防ぎようがなく、

「降参」。まあ相手の油断を利用したのは良かった。73点ぐらいか。それと……」

作者はそう言うときズボンのポケットの中をあさる。

「あれ……これじゃない、これでもない……」

あさるたびに煎茶の茶葉が出てきたり、紅茶の茶葉が出てきたり、抹茶の粉末が出てきたり……

「全部お茶じゃないですか……」

「おおーあつたぞー」

作者の大量のお茶の中から出てきたのは……………

「眼帯!?!」

「おう、おまえ魔力でかすぎるからこれで封印。これを外せば全力出せるから。だけど普段は着けていること。それとこれをつけている間は精神力とかそういうの関係なく偏在が2体しか召喚できなくなつたから」

「……………つけなきゃだめですか?」

「ダメ」

マクシミリアンの左目にどこかで見たとのことのある黒い眼帯が……………

……………

「これって見ず楽不是吗(ISのラウラの眼帯ですよね)?」

「片目見えなくするからねえ(正解で〜〜〜す)」

「……………(あとで殺します)」

「……………(殺れるものなら)」

「おい、おまえら、すごい威圧感を人に当てるんじゃないよ」

「あ、ごめんなさい(すまん)」「」

この日以降、マクシミリアンの左目には眼帯が見られるようになった。

「それと、もうしばらく剣の稽古ね」

山中の幌馬車

ガリアを何とか突破しゲルマニアに戻って来ました。ですが、まだまだシュトゥットガルト領にもどるのには日にちがかかります。今は、草原で見つけた馬に乗って移動しています。ただの馬のままだと時間がかかったり、越えられない段差が出てくるので強化系の魔法で強化しているのです、本来の数十倍もの身体能力を誇っています。カミーユさんもちゃんと乗ってくれていますよ。最初は落ちまくりでしたけど。

「うぎゃあ」

「いやああ」

「ぐはっ」

って感じでしたけど。今は

「慣れれば風が気持ちいいもんだな」

とか言っちゃってます。僕も眼帯をつけているせいで視界が狭くなったので何度か木の枝に当たりましたが……

「カミーユさん、どっちに行きたいです？山道と草原。山道の方が早いですけど、草原の方が楽は楽ですね」

草原ルートで行くと遠回りになりますし、幻獣とか危険な生き物がありますからね……倒せますけど。

それにたいして山道ルートは危険な生き物とかでますけどこの地域に生息する数は少ないのと完璧な近道ですからね。

「山道ルートだな、わざわざ遠回りして遅れる必要もない。それにお前の家の親が心配しているだろうからな。さっさと帰って親孝行してやりな」

ま、まさかカミーユさんがそんなセリフを吐くとは思いませんでしたね。まあここはお言葉に甘えておきましょう。

「ありがとうございます。では、山道側のルートに行きましょう」「マクシミリアンとカミーユは馬を山に向かって駆けさせる。」

中身が金品だったとしても、女だったとしても何でもいいのだろう。たとえ他のものだったとしても彼等からすれば金になればいいのだから。もし、馬車ではなく普通に馬に乗っていたのであれば迎撃は可能だっただろう。だが、今は馬車に乗っている。後ろの荷台の中の他の少女達には、このような大型の馬車を走らせることはできない。馬車をとめて応戦すれば、私など無視して中の他の少女達を襲うだろう。かといって馬車をとめないでそのまま馬車を走らせてもそのうちに捕まってしまう。馬車をジグザグに走らせているから魔法を放たれることはそうそうないだろう。しかし、それも、今はまだ馬達に余裕があるからできることであり、馬の力が尽きれば魔法が馬車の車輪に向かって放たれ、走れなくなり、捕まってしまう。あとちょっとなのに、あとちょっとで治安のいい土地であり、平民に対して扱いが良いと言われるシュトゥットガルト領に着く。それなのに………

「くそっ」

思わず口からそんな悪態がわき出た時、二時の方向から二匹の馬が馬車を越えるように飛び出してきた。

山賊が馬車を狙って行動しているのはここから見てもよくわかる。そして、馬車には既にやられてしまったのか、もともといなかったのかは分からないものの、護衛と思しき姿はない。どちらにせよ、このまま放っておけばあの幌馬車は山賊の餌食となるのは明確だと

というのが分かる。

「カミーユさん」

「分かってらあ」

「そうですか、行きますよっ」

二匹の馬は加速し、幌馬車を飛び越え、すぐ後ろに続く山賊を踏みつぶすことを狙っているかのように飛んだ。そして、幌馬車の後ろに居た二人の盗賊は乗っていた馬ごと、上から降ってきた馬に踏み踏まれる。

「な、なんだ」

「敵だああ」

百名あまりの山賊団は突如現れた二人の者に対して一時的に落ち着きを失うも、現れたのが二人だけ《……》ということに気づき、すぐに落ち着きを取り戻す。

「なんだ、二人か」

「俺達の仲間を……よくも」

「邪魔だ、俺達はお前なんかじゃくて後ろの幌馬車に用があんだよ」

「命が大事ならそこをどきな」

と、それぞれが違うことを、でも根本的には同じようなことを口にする。

「幌馬車の人、先に逃げてください。ここは僕達が制圧します」

ただ、彼等山賊は烏合の衆でしかない。そんな連中に……

「……負けるわけではない。マクシミリアンは懐から杖を抜き、カミーユは杖を抜くが、あくまでそれは杖を媒介として魔法を放っているように勘違いさせるためであるために、右腕を山賊に向けてかまえ……」

「ファイアーボール」

炎の砲弾が多数放たれ

「火の精霊よ、我が激情に答え熱き炎を放て」

カミーユが言霊を発すると、カミーユの頭上に大きな鳥の形をした

青い炎の大群が大量に顕れ、炎の砲弾と入り混じりながら山賊団を襲う。それらは山賊が悲鳴を発する前にその四肢を焼き切る。

「お、お頭達はまだ来ないのか」

「このままじゃ俺たち達は全滅だあ」

「こいつら強えぞ」

山賊の、炎を喰らわなかった生き残りは、今頃になって目の前に居る二人の強さに気づく。普通なら100人以上に対してたった二人で現れた時点でこの二人が相当の実力者だと気づいてもおかしくないのだが……やはりこいつた連中は頭のネジが外れているらしい。ただ、異常なのはもう一つあった。

「馬車の人、早く出して下さい。戦闘の余波がそっちに行っちゃいますよ」

幌馬車が一向に出ないのだ。そして、馬車の操縦者が馬車から下り、マクシミリアン達の方へ言う。

「こいつらは本隊じゃない、まだ後続が、本隊1000人余り来るの。この状態で走りだしてもそいつらが私達を追っておしまい。だからあんたたちと共同戦線を組むわ。私だって一人の戦士なの」

馬車の操縦席から降りてきたのは……

「（マクシミリアンと同じくらいの女!?）女の子!?!」

「なによ、その眼は……」

馬車から下りてきたのはマクシミリアンと同じくらいの年頃の銀髪の少女だった。

山中の幌馬車（後書き）

だいぶ悩んだ末にこんな状況に………後先考えずに
その日の気分だ書いてるのがいけないですよ、きつと。

やっぱり先のことを考えて書くべきでしょうか？

他の二次の作者の方々はどうやって書くのでしょうか？

どなたかアドバイスを………

血に飢えた銀色の弾幕

「子供だからってバカにするんじゃないって……片方は私と同じくらしい子供ね……みんな、ちよつとの間馬車の中で待つてて」
銀髪の少女はマクシミリアンにとってどこかで見たことのある顔つき。でも、それを見たのはこつちの世界に来た後ではなく、前世で見たことのある顔つき……メイドで時間を操れ、ナイフの弾幕を作りだし、懐中時計の似合う、東の方の計画にでてきたキャラクターのような顔つき……

その少女は虚空にナイフを大量に召喚すると……

「ぎよあああああああああ」

「うわああつああつあああああああああああああ」

「ヒイイイイイイ」

「たすけてええええ」

それらはあくまで山賊団の居る『方向』に向けて『放たれただけ』であり、一本一本の制御は行っていないのか、ナイフの弾幕が製造される。ナイフは次々と少女の頭上の虚空に召喚され、絶えることなくその弾幕を作りだす。少女の両手の近くにも少しだけ召喚され、少女は親指と人差し指以外の隙間にナイフを挟むと、その場で一人で踊るかのように回転し、ナイフを放つ。少女が手から投げたものは、他のナイフと違い、狙いがしつかりとしており、確実に山賊の喉を抉る。山賊が回避しようとして動くと、弾幕のナイフに投げたナイフが当たり、投げたナイフが弾かれ、山賊の喉を抉る。

「凄……」

「……近頃のガキは規格外ばかりかよ……」

「……そう思わずつぶやく二人の元には一本もナイフが流れてこない。何てことはなく、かなりの数が飛んできているものの、動きながら、

山賊団に向け、マクシミリアンは炎の砲弾で、カミーユは木の枝や風の塊で弾幕を作りだし、山賊を抹殺していった。

「あんた達だっておかしいわよ……相当の実力者ってのは分かっていたつもりだったけど……私の弾幕をかわしながら普通に魔法の弾幕作り出せるのよ……普通ならあんた達の頭にサクツて突き刺さってるわよ……」

「『教授』ですから」

「この程度なら何とかなるだろ、普通に……」

「へえー、言い方がちょっとキモかったわよ、黒髪の人……」

「……って……『教授』？」

「ええ、『教授』のマクシミリアン・フォン・ケンプファルトです」注、こうやってほのぼのと会話している間にも、刃物の弾幕が飛び、肉がやける匂いがし、人間がハリネズミ？……木の枝ネズミに成っていつています。

そして……盗賊の先遣隊100人余りは永久の眠りに「本当に『教授』なの！？」つきまし……どうしたんでしょう。この女の子は？

「本当ですよ。証拠を示せて言われても何も持っていません……この黒い髪じゃ駄目ですか？ハルケギニアの貴族で他に黒い髪の方はいないと思いますか……」

「そうね……って、私は平民なんだから……ひつ、申し訳ございま「あ、別にそういうのいいですよ。貴族だからって何か特別なのはよく考えるとおかしいことですからね」……は、はい。

えーと私は十六夜咲夜、ハルケギニア風に言うと……サクヤ・イザヨイです。ロバ・アル・カリイエよりもっと東のジパングの出身です」

……原作にそんな地域出ましたっけ？

……か絶対に……^{日本}ジパングだ……

悲劇の孤児院

パカラ、パカラ、パカラ・・・・・・・・・・・・・・・・

一台の幌馬車はシュトゥツガルト領を目指し、のんびりと進んでいる。急いだ方が山賊に襲われにくく良いかもしれないが、下手をすると山賊を領内に引き連れて入ってしまう可能性があるのです、それは後のこと話考えると遠慮したい。

「へえーサクヤさんってジパングの貴族の娘さんなんですか」

「何でそんな奴がこんなところをうるついでなんだよ・・・・・・・・」
現在はサクヤさんの身の上を聞いたり、後ろの荷台の人達、まあサクヤさんも同じような状況だそうですが・・・・・・・・まあその方々の事情も聞いています。

馬車に乗っていた人たちの平均年齢は12歳だそうです。

みなさん親を早く亡くすなどして、ロマリアの孤児院に引き取られていたそうですが、どうもその孤児院の院長が変態だったと・・・・・・・・・・70ぐらいのおじいさんなのに、孤児院で養っている女性に手を出したとか・・・・・・・・それも7歳の女の子に・・・・・・・・僕より一年年下の女の子に。その晩『いや』とか『痛い』とか『そんな場所触らないで』とか、取りあえずヤバい言葉が孤児院長の部屋から聴こえて、年がある程度の方々が何をしているのか気づき、危機を感じたとか。次の日の朝、孤児院の裏庭に白い変な液まみれになり、死んでいるその少女が見つかったとか。そこで、幌馬車を奪い、逃走したそうです。

サクヤさんだけ事情が違うようですが・・・・・・・・・・
どうやら家の人から、世界を知ってこい。まあ楽しかったら帰ってこなくても大丈夫だよ（笑）。と言われたので、世界を見て回ろう。とハルケギニアまでやってきてしまったと。そこで、ハルケギニアで一番偉い国？であるロマリア見物に来たところ、孤児院と

思しき建物から幌馬車がふらふらしながら飛び出してきたため、その幌馬車を止めてしまったとか………それで、孤児院からそこで働いていると思しき聖職者が出てきたが、その人たちの顔がどうも怪しかったから、という理由から幌馬車の操縦を代わり、ここまで来たとか………国境越えるのに絶対に通る必要のある関所はどうしたんですか!?と聞いたところ、恐ろしい返事が返って来ました。ぶち破ってきたそうです。建物の要所要所にナイフを投げて倒壊させたとか………

絶対に指名手配とかになりますよ、と思っていたところ、そんなへまはしていないとか。まあそんな危ないことはやってほしくないです、これから先………

「で、何時になったら来ますかね、ヤツらの本隊は」

「さすがにのんびり歩み続けるのにも限界があるしな」

「そろそろ来ると思うわよ、ヤツらだっていつまでも得物を目の前にして待つてはいられないでしょうからね。にしても三人で1000人も本当に相手にできるの?」

「楽勝ですね(雑魚が束になっても同じことだ)」「」

「随分と強気なこと………」

その時、左右から汚れた服を着た男が二人ずつ現れ、

「お頭、見つけやしたでエエエエ」

という声を上げると、

「よくやった、総員、馬車を襲えええ」

という森の中から掛け声がかかり、幌馬車を囲むように大量の山賊団が湧いて出た。

悲劇の孤児院（後書き）

時間がないと短くなりますね。

おかげでここ最近の話は短いものばかりです。

すいません。

できる限りそれなりに長い物を書くように気をつけますので、これからもよろしく願います。

舞うは銀、降るは青

「ようやくおいでなさりましたね、奴さんがた。にしても数が多いですね。カミーユさん、即興詩を詠うんで時間稼ぎを」

「はいよ、即興詩が何かは俺の知ったこっちゃねえが、時間稼ぎすりゃいいんだろ。サクヤ、ちよいと手伝え」

「しょうがないわね、さっさと戦列に戻ってよ……」

「即興で詠う詩ですよ……火は生命を脅かし、我ら知恵のあるものを温め、助ける。そのぬくもりは、間違えば牙を露わとし、正しければ安らぎを与える」

マクシミリアンが、幌馬車の上で詠いだすのと、時を同じくして、カミーユが手元に風を集め、腕を振り、空気の砲弾を放つ。サクヤは、腰のホルスターからナイフを幾本か抜き、襲いかかってくる山賊に向け、投げる。

「火は、闇の中で、道を示す。その明りが正しい道を示す時、我らは歩を進め、道を進む」

幌馬車の上に立つマクシミリアンに向けて矢や、弾が放たれることもあるが、それらは全てサクヤが投げるナイフによって斬られ、弾かれていた。

「火を武器に、道を切り拓くつと、ファイアーボール」

マクシミリアンが放つようなファイアーボールは赤色。しかし、今、マクシミリアンが顕現させたファイアーボールは青色。炎の色は、その炎の温度によって変わる。赤色と青色の二色の場合、青色の方が炎の温度が高いことを示している。

「いつもより、温度が高い？」

1000人余りの山賊団に襲い掛かる弾幕は、銀色と無色だけだったところに、青色が増え、同時に散る、命の数が増える。

「当然ですよ、普通、魔法の詠唱は、ルーンで行います。あれは言葉を利用して精霊の力を引き出しているんですよ。それに、あれだ

って詩の一種ですよ。だから自分で詩を作って精霊の力をまとめているんですよ。まあ、さつきのは詩というより、火の説明みたいなものでしたけどね……」

「へえ、上手いこと考えるものだ。さすがは『教授』といったところか……」

「化け物なのかしら？」

軽口を叩きながらも、三人は踊るかのように動き、動くたびに周囲の人が倒れ、燃え、腹に穴を開け、倒れる。三人の攻撃を受けたものは、断末魔の叫び声を上げることすらできずに儂く散って行く。

「なんて奴らだ」

「お、お頭あ……」

「ひい……」

今さつきまで隣で、熱を持っていた仲間が、空気の砲弾を喰らい、赤い内容物をバラまく。

今さつきまで隣で、熱を持っていた仲間が、青い炎の塊を喰らい、焼け焦げる。

今さつきまで隣で、熱を持っていた仲間が、銀色に輝く塊を頭部に喰らい、こと切れる。

仲間がやられた仕返しにと、弓や、銃を構えたものは、次の瞬間には犠牲者へと早変わりする。

木の陰に隠れ、やり過ぎしてしまおうと考えたものは、幹部達から斬られるか、空気の砲弾が木を突き破って、体の中身をぶちまけるか、首を切られ、死ぬ。

恐怖に怯えたものは、上から雨のように降り注ぐ、青い炎の砲弾が、焼き尽くす。

山賊は、物の数分で、屍の残りかすへと早変わりした。

「ば、ばかな。俺達が、くそ、ラ．．．．．
．．．．．エアカッター」

唯一、木の裏に隠れて、やり過ごすことに成功した、山賊長も、冷静な判断ができなくなり、蔭から飛び出し、詠唱していた魔法を放つ。正直、マクシミリアン達と比べると、雑魚以下の雑魚の魔法であるが．．．．．

「案外、数の割にあっけなかったですね」

「お前が戦闘時に罠の類をまったく仕掛けねえぐらいだもんな」

「えげつないことをするのね．．．．．
．．．．．」

馬車の上に、三人は立ち、周囲を見渡す。彼らの視界に入るのは、数々の死骸。

「それと、中の方々々々終わりましたよ」

「わああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ

喜びのあまりか、中に居る人たちがはしゃいでいるらしく、幌馬車

の上は、揺れる。

「まったく。あんまり付き合いが長いわけじゃないけど、みんながこんなにはしゃいでいるのは初めて見るかな」

「まあ、この現状からほぼ確実に身の安全がつ、つつ！」

マクシミリアンの視界の端に、杖を構えた男が映り、その男の杖から大気の歪み生まれ、その歪みが、幌馬車に向かって放たれるところが……

「A・Tフィールドっ」

幌馬車の側面がある座標に、最強の盾を、顕現させる。空気の刃は、最強の盾に当たり霧散し、「ウインディ・アイシクル」氷の矢弾が無詠唱で大量に召喚され、山賊長を貫き、跡形もなく、ぐちゃぐちゃにした。

pVアクセス30万突破祝い。サクヤの改変とアンケート実施要項

とある屋敷の一室にて……………

作「ついに来ました30万回」

マ「ようやくですね」

カ「そうだな、にしても此処まで来るのに、何カ月もかかったな。何カ月かかってんだ？」

作「約3カ月……………じゃないですね、ジャスト3カ月です！」

マ「……………そりゃまたすごいですね」

カ「なかなかそんなジャストなのはいいんじゃないか？」

作「そうですねえ。それと作者から提案があります」

マ「どうしました？」

作「マクシミリアン、君の口調変えようかな……………って思ってるんですよ。BLEACHの『浦原喜助』風とか、BLEACH『浦原喜助』風とか……………」

マ・カ「浦原喜助しかないし！」

作「教授と言えばねえ。そういった類の第一人者はあの浦原喜助でしょ」

マ・カ「関係ないキャラ出すのかよ（んですか）！？これゼロの使い魔だぞ（ですよ）」

作「ふ、我が指先一つで死ぬキャラクターごときが、我にたてつこうと言うのか」

マ・カ「死ねやああああ（くたばって下さい）」

作「な、あ、ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ」

マクシミリアンの関節技と、カミューのヘッドロックという拷も・
・ゲフンゲフン、制裁を喰らっているのではしお待ちください
い……………

作「まあ、いいとして、読者のみなさんにどうかといいたいと思いま
す。浦原喜助の口調でいいと思う方は を、駄目だと思う方は？を、
ではなく、賛成か、反対かを書いて、感想を利用して送って下さい。
あくまでこれ以降に、少しずつ口調を変えていく、という形にしま
すので。（注 作者が、浦原区長がいい気がするので、取りあえず、
僕自身の票も入れさせていただきます）
マ「よろしく願います」

作「サクヤはさあ」

サ「ん？」

作「マクシミリアンのところでメイドやってもらおうと思っただよ
ね」

サ「はあ！？私がメイドお？」

作「おう、だから口調変えろ」

サ「ちよつとまで、だからそんなこと勝って決めようとするなよ」
作「うるさいぞ、マクシミリアンだって、俺が剣術つけてやったん
だ。地獄みただったけど、しっかり耐えきったぞ。だから同じよ

うに、お前も地獄のような状況で、口調を変える」

サ「ちよつ、ふざけんじゃ？あつ」

現時点の昨夜の口調が認められないため、作者による峰打ちという制裁をサクヤは受ける。

サ「なにしゃがぎゃあ」

さらに、そこにとどめでも言わんばかりに、鞘で頭を殴られる。

サ「たんこぶができるじゃねえぎゃんつ、分かりました、分かりましたから、こんな感じの口調でいいのでしょうか？」

作「よし」

サ「えーとじゃあ後はどうしたら？（作者め、時間止めて殺す）」

作「えーとこのビデオ見て、この人の口調真似て。あと、お前が何考えているか分かるが、この世界じゃ俺が神以上の上位個体だからおまえの能力は効かねえぞ」

サ「・・・・・・・・・・・・・・・・分りました・・・・・・・・・・・・・・・・」

マ「サクヤさんって結局東方の国の、いえ、ジパングのメイジなんですか？」

サ「いいえ、違います。メイジといえるのかどうかは分かりませんが、近い物で言えば、陰陽師という存在があります。私は、すべての生き物の中が発言する可能性を秘めている、『〜』程度の能力」というものを本来はあり得ないので、二つ持っています」

マ「そうなんですか。なんて言うんですか？その能力」

サ「『時間を操る程度の能力』と『物を複製する程度の能力』ですが」
マ「なるほど、だからあんな惨状を作りだせると……って口調変わってませんか？」
サ「とある強情な上位個体に強要されました……」
マ「お疲れ様です……」

マ・カ・サ「これからもこの二次をよろしくお願いします」
作「ついでに他のも読んで下さると嬉しいです」

マ・カ・サ「シツネエエエ（いい加減にしてくださいよ）（迷惑なのに気が付いてないんですか？）」

えーとマクシミリアンの口調についてのアンケートにご協力をお願いします。

今回もかなりのグダグダ回になってしまいました。申し訳ございません

せん。少しづつ良くなっていくと思います。これから温かく見守
って下さいます。では……読んでくださってありが
たうございます。

意味

「お、街が見えてきましたね」

「ほー、じゃあ、あの奥にあるでけえ家がお前の家か？」

「そうですねよ〜ふわあぁう」

うう、ここ二、三日あんまり寝ていませんからね。さすがに眠いで
す。そこに馬車の震動・・・何かの嫌がらせでしょうか？物
凄い勢いで頭が痛くなっていますよ・・・

「そろそろいいですよ、マクシミリアン、カミーユさん。あとは私
が動かしますので、それにちよつと寝たほうがよさそうですね、二
人とも目の下にクマができていますし・・・」

さつきまでは断っていたんですけど、さすがにそろそろ厳しいです
ね。サクヤさんには悪いですけど、

「すみません、ちよつと代わって下さい」

「俺はいいぞ」

うわあ、カミーユさん相変わらず強い体だなあ。あ、でも僕が周囲
に気を配っているとき仮眠をとっていましたっけ？それならこれも
納得できますね。それじゃちよつと中に失礼させてもらいますか・・・

「じゃあ、しばらくは休んでいてください」

「はい、任せました」

布をめくり、中を見ると・・・

・・・

・・・

・・・寝ている少女多数。

中では正直言って寝ずらいですね、上に乗りますか。

マクシミリアンは、幌馬車の上に登り、そこで寝そべる。周囲には、
ちゃんと柵がしてあり、そうそう幌馬車から落ちることはない。す
いませんねえ、と彼がつばやき、右腕を、自分の顔に持っていき、

そのまま寝てしまった。

「寝てしまいましたね……………」

「結構無理していたからな」

「そうですね」

御者の席に座る二人は、どこことなく、マクシミリアンに対して引け目があるのか、マクシミリアンの様子を窺うようにしながら、そして、その声にはどこことなく、マクシミリアンを心配する感じと、労わる感じが含まれていた。

「なんで、私たちを助けたんですか？」

「さあな、俺じゃねえ、マクシミリアンに聞けよ」

「…………もうひとつ、カミーユさんに聞きたかったことがあります」

「なんだ」

「あなた、エルフですよ？」

「……………だったらなんだ」

カミーユは横目にサクヤを見る。ただ眺めているようにしか見えないう目線ではあるが、かなりの殺気をサクヤに向けて飛ばす。サクヤの側としても、それは最初っから分かっていたことらしく、全く動じることはない。

「おれがエルフだったから、俺とマクシミリアンをロマリアとやらの異端審問という名の死刑にでも行わせるってか？もしそういうことを考えているなら、今ここでお前を俺が殺す」

カミーユの右腕には空気が圧縮を始め、何時でも放てるようになっており、通常では彼が纏わない、反射が全身に展開される。

「違いますよ、ただ……………」

一方サクヤの側からはまったく殺気は放たれず、そして、彼女の武器であるナイフが収納されているホルスターに手が伸びるといったともない。

「普通なら強い者が弱い者には従わない。なのにあなたは何故彼に

従うの？」

客観視した場合の謎ともいえるものだろう。人より、エルフの方が強い。エルフは人を蛮族と呼び嫌っている。それはサクヤのようなものでも知っている事実だ。そして、嫌っているはずの蛮族にカミーユは従っている。意味が分からないことだらけといえるだろう。

「強さだけなら、マクシミリアンの方が強いぞ」

「え？」

「そのまんまだ。おかしいだろ。人間のはずなのによ、エルフの3000余りの軍勢を一瞬で無力化させてよ、そこからさらにエルフで一番強い奴まで潰しやがったんだ。俺はそれ以前にあいつと決闘やってな。負けたよ。そしてあいつの強さに魅かれた。だから俺は今はいつについて行っている。それだけだ」

「え、いや、え、これまでの戦闘のときだってあなたの方が圧倒的に攻撃力があつたような」

「眼帯だ……」

「眼帯？」

「そう、それがマクシミリアンの力を抑えている。あいつは目に怪我なんか負っちゃいねえ。ただ、あいつの力は、人間とは一線どころの差じゃねえ。その力を抑えるために眼帯をつけているだけだ」

「……」
「おまえはこれからどうすんだ？これからまたお前は放浪の生活に戻るのがか？」

「それは……」

「お前は別にどう生活しろ、とか決められるもんじゃねえ。俺達も強要はしねえ、自由にしな」

「私は……マクシミリアンに従います。彼のもとに、居たいと思います」

「ふん、自由にしな」

カミーユは鼻で笑いはしたが、実際は嬉しかった。マクシミリアンはこれから敵を作ってしまうタイプの人物だ。彼を助けられる人物

は多いほうがいい。自分が惹かれた人物が途中でおかしくなっ
てしまったら悲しいから・・・・・・悔しいから。

「カミーユさん、笑っていますよ」

「ん？そうか？気が付かなかった」

そのとき、空は青く澄み渡っていた・・・・・・

・・・・・・

起きる

馬車は数時間後に街につき、マクシミリアンの屋敷の前まで来た。

「おい、マクシミリアン、起きる」

「起きてください」

「……………ものの、幌馬車が普通に屋敷の中に入れるはずもないので、屋敷の近くでカミーユとサクヤはマクシミリアンを起こし、中にはいれるようにしようと頑張っているのだが……………」

「はいはい、あと100日後にイ……………スースースー」と、起きかけてもすぐにそのまま寝てしまう。

「これどうしたらいいんだよ……………」

「まったくどうしたらいいのやら……………」

と、二人にとつてもお手上げの状態である。

そこへ、つまらないからと街を見て回っていた少女の一人が帰って来た。

「あれえ、まだ寝てるのぉ？」

まだ、幼く、小さい彼女が首をかしげながら、いたずらな笑みを口元に浮かべる。小さい子だから可愛いように見えるが、これがもし大人だったら……………まあ、人によっては茶目っ気があるように見える人もいるだろうが、気持ち悪い人に見えるパターンもあるから成長していく最中にどちらかを見極めて、やめさせる必要もある要注意人物だ。

「どうしたらいいのかしらねえ？」

「よし、腹でも決るか？」

「思いっきり殺そうとしないでください」

「死なねえだろ、こいつなら……………多分」

「多分って自分でも言っていますよ……………」

ハア、と二人がため息をつくものの、マクシミリアンは寝息を立てたまま、一向に目を覚まさない。

先ほどの少女が二人の肩をポンポン、と叩き、先ほどまで以上に悪戯な笑みを浮かべる。

「私が起こしてあげよっか？」

二人はこんなところに救世主がつ、と目を輝かせながら、

「お願いします」

「任せませ」

と、マクシミリアンを起こすという、自分達の重大な任務を投げ捨てた。

少女は自分の周囲に広がっている袋の中身を取り出しては、すりつぶし、これまでにすりつぶしたものと混ぜる。これを何度も繰り返ししていた。中身は、いっけん同じものに見えるものの、よく見ると形が違ったり、中には色が違うものもあった。

「さすがにこの匂いは……」

「臭くはないが、すっげえ辛そうな匂いだな」

「えへへ……」

そう、先ほどから少女がすりつぶしているものは全て香辛料の類。

そのため幌馬車の中は香辛料の匂いがこもっていた。

「そしてここにー」

自分がこれまですりつぶしてきた香辛料の入ったカップを指さすと、

「お湯をー」

右手にお湯の入ったカップを持ち、

「淹れまーす」

カップの中にお湯が入り、何とも言えない飲み物が出来上がる。

「そしてー、助けくれたお兄ちゃんの中に、入れまーす」

カップの中のヤバイ液体は、無情にも、少女が強引に開けた口の中

に流れ込んで行って、しまっはずだった。少しだけ、マクシミリアンが動いたために、液体は、マクシミリアンの鼻の中に……。「むにゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ」

その悲鳴は白の国と呼ばれる国でも聞こえたとか聞こえなかったとか、真実は不明だ。

そのあと、マクシミリアンはサクヤの淹れた紅茶で口直しをしてから、馬車を進めた。

『灯台もと暗し』って言葉知っていますか？はい、僕は今、まさにそれです。

「父上へ母上へ、マクシミリアンです。ただいま帰りました」

我が家に帰って来ました。で、城門？を通り、家の扉をあけ、中に入り取りあえず叫んでみることにした僕ですが。つと、危ない危ない、今僕の頭すれすれを土の塊が飛んで行ったんですけど……

と、その土の塊を放ってきた方向を向くと、目が物凄く、決壊寸前な、父上と母上が……と、何で僕に向けて杖を向けてるんでしょうね？

「何で早く帰ってこないんだ」

「途中で行き倒れてるかと思っただわよー」

と、思いつきり泣いているようです。あんまり帰ってくるのが遅くて心配をかけすぎたようですが……あれ？よく考えてみると半年以上も家を空けていたことになりませぬえ……それには、まあ、何というか……

「すいませんでした」

頭は下げるべきですね。

とまあ、そういう経緯を経て、今、ケンプファルト家の食堂に、馬車の中の方々も一緒に来ていただいています。こうやって大人数の時に無駄に広い食堂は役に立つんですね……

「で、そちらの白髪のお嬢さんは拾ってきた伴侶かしら？」

と、何気なくとんでもない質問をしてくるのが母上ですが……
……言われてみれば、サクヤって銀髪よりも白髪の方が近い
ですね……白銀？

って、あれ？サクヤ？なんかフリーズしてますよ？大丈夫ですかね？

「サクヤ、サクヤ、起きろー……まったく、母上が変な質問をするから。違いますよ、ただまあ、命の恩人？になりました」

あ、サクヤが小さくなっていく……マ○オ？

「なんとというか、マックスは相変わらずねえ。これだから下手に社
交界の場に出せないのよねえ。出したら翌日には修羅場に、とかな
っていそぐだもの。キュルケちゃんも撃墜寸前だっというのに……」

「ふえ？何の話を母上はしているのでしょうか？まあ、声を小さくし
て喋ったということは僕とは関係のないことでしょうし問題はない
でしょうね。」

「まあいいわ、で、そちらの方がエルフなのかしら？」

「ああ、そうだけ、カミーユって名前だよろしくな」

意外とカミーユさんって社交的な人なんですよねえ、会った当初は
自分の力とかのことを考えてひきこもりになったりしているのかと
思っていたんで「何か失礼なこと考えているだろう」

「してませんよ」

相変わらず読心術が使えるところが凄いですねえ。

「にしても凄いわねえマックス」

「？何がですか母上」

何が凄かったのでしょうか？本当にエルフを味方につけたことでは
ようかね？

「あら、もしかして気づいていなかったのかしら？カミーユさんの
こと」

「え、何の事だかさっぱり……」

まったく何が言いたいんでしょうか？カミーユさんだって普通のエ
ルフですよ、ただちょっと強いつて言う。なにか秘密でもあるん

「ユさん、表へ」

「上等だぜ」

お互いに、相手へ殺気をぶつけながら、食堂を二人は後にした。

「マックス、強く生きろ」

父上、何なんですか、そのかわいそうな生き物を見た、という感じの目は。

「諦めなさい、コンラート。この子には一生、女心というものが分からないでしょうから」

母上も何気なく酷いことを言っていますし。僕の扱いひどくないですか？

「はあ、やっぱり分かっていないようね、遅くとも、今の私の言葉で気付かなくちゃいけないのに」

え、何にですか？まったく意味が分からないですよ。

まあ、分からないことは置いて何しましようかねえ。よし、疲れたから寝ましょう。

「父上、母上、お先に失礼します」

僕はこうして食堂から去った。

「なあ、アリス」

「どうしたのコンラート？」

マクシミリアンの去った食堂では、馬車組や、メイド達、そしてアリスとコンラートが食事をしていた。

「あの二人やさあ、我が家のメイドの何人かがすごくかわいそうだなあ、っっておもってさあ」

「そうねえ……でもあなたも昔は人のことを言えた様子じゃなかったでしょう」

とアリスが言うと、ピクッとコンラートの肩が動き、ガタガタと震えだす。

「おいおい、昔の話は無しにしてくれよ」

「うふふ、ちゃんと自覚があるのならそれでいいわ」
アリスは顔に嬉しそうに笑みを浮かべた。

そのころの、ケンプファルト家の庭園にて

「サクヤ、さつさと倒れる」

「お断りします」

弾幕が常人の目には追えない速度で飛び交っていた。

後日、この庭園の修理費用は、マクシミリアンの懐から出ることとなり、カミーユは盛大に頭を下げることになったのだった。

『灯台もと暗し』って言葉知っていますか？はい、僕は今、まさにそれです。

お久しぶりです。本当にお久しぶりです。長い長いテスト期間が終わったので、またある程度は定期的に更新できるようになります。これからもこのssを読んで下さると幸いです。

ちょっと落ち着きましようか？話し合いが必要みたいなので・・・（前書き）

お久しぶりです。

だれも待ってなどいなかったかもしれせんが『武器と魔法と技術と知識は使いよう』累計31話です。

ちょっと落ち着きましたよ？話し合いが必要みたいなので・・・

「えーとでは、こちらの銃の砲身内部に螺旋状の溝を入れて、後ろから弾込めができるように・・・」

「分かりました」

「銃弾その物の後部に火薬を込めて・・・」

「了解です」

あ、どうも、マクシミリアンです。現在、うちの家のすぐ近くの、というかうちの家の周囲にできた街の中にある銃器を大量生産する工場に僕はいます。まあ、少しでも銃の性能を上げて、実戦でもっと使いやすく、ということを考えながら改造しています。まあ実際に作るのは僕ではなくてこの工場で働いている人たちなのですが・・・そうそう、この工場は僕の直営の工場なので、給料などは僕のポケットマネーから出ていますよ。ここまで来るのに大変でした。ハルケギニアには職人が物を作るといった感じの概念がありますから、大量生産という物の考えが無いんですよ。ですから最初のころは僕の考えが理解されませんでした。ここ最近になって、ようやく大量生産ができるようになりました。で、かなりの速度で大量に作れるようになって来たので、改造してみよう。という感じですよ。

あ、それと、今12歳です。サクヤは11歳、カミーユさんは16歳ですよ。というかよく考えるとカミーユさんって凄い若い時からエルフの5本指って・・・将来が未恐ろしいってやつですかね？

「マクシミリアン様、次はこの前製造された造船所ですよ」

「ありがとうサクヤ」

サクヤは秘書？に落ちつきました？なんか落ちついてない感じもするんですけど・・・12歳だから別宅にしよう、と父上と母上が言いだし、サクヤをメイド長に全部で5名のメイドが直属

で働いてくれています。その5名が全員あの時の馬車のメンバーだ
というのはいかがでしょうかと思うのですが……

「報告書だと試験艦、バルト級バルトと、バルト級レーゲンの製造
が完了、バルト級ツヴァイクは九割がた完了した模様です。にして
もいいのでしょうか？」

「ん？」

何か問題ありましたっけ？

「コンラート様達にヴィンドヴォナへの連絡を任せて」

「多分大丈夫だと思うけど、鉄鋼の装甲を付けたフネは沈みにくい
けど燃費悪いから、あっちから寄せとかなんか言ってくることはない
と思いますよ」

艦の重量が物凄く増えるから風石の使用量が半端ではなくなります
し。

「トリスティンみたいな国ではないですから寄せとかは言ってい
ないと思いますよ、謀反の疑いあり、とかならありかねますけど……
……」

「……充分問題があると思いますよ、マク
シミリアン様……」

そこら辺は気にしてはいけませんよ、いざとなったらどこかへ高飛
びでもしましょうか、それこそサハラやガリアにでも。

「それと、マクシミリアン様が調べるようにとおっしゃっていた、
アルビオンの風石の件ですが」

「どうでした？」

「やはり大陸が浮かび上がるまでは風石が採取できることは分かっ
ていなかったようです」

ビンゴ……うちの領地の地下も探ってみましょう。可能性とし
ては、風石がありそうですね。もしその量が多ければアルビオ
ンみたいに浮いてしまう可能性も否定できませんから……

「エルフの技術者の方々に協力を仰いで、それとジャイアントモ

ルなども使用して調べてください。もし出てきたらうちのフネに使
いましょう。それとサハラから火石を取り寄せておいてください」
「分かりました」

相変わらずサクヤは優秀ですね……………

「……………」

僕とサクヤと、工場長アーベルの目の前には銀色に輝く巨大なフネ
がそびえているんですが……………

「アーベルさん、僕は100マイルで作るように指示したはずだ
が……………」

一瞬だけきよとした顔をアーベルは見せると、悪戯が成功した
子供みたいな笑みを浮かべる。

「ハツハツハ、ボウズ、折角だから150マイルで作ってやったぞ、
喜べ」

……………50マイルも予定より大きいって、問題大あ
りじゃないですか。

「にしてもボウズ、こいつはおもしれえ作りだよな。お前はよくこ
んな変なことをポンポン思いつくよ」

確かにそうです。これまでのハルケギニアのフネは、船体の側面に
大砲を付ける戦列艦という種類の物でした。ですから、船体の上は、
攻撃が全くできない弱点になっていたのです。近代的な戦艦の特徴、
甲板に巨砲を取り付けるといふもの。弩級戦艦と呼ばれるものです。
その2タイプの戦艦を掛け合わせて作った新種の戦艦とでも言いま
しょうか。

甲板に巨砲が設置され、側面にも大砲が大量に設置されている艦で
す。とはいえ、まだ武装は一切搭載されていません。理由は簡単で

す。新しい銃が完成すれば新式の大砲も製造が可能になります。だつたら新しく強力な大砲を取り付けたほうがいいじゃないですか。「まあ武器のイメージ固まったら俺ん所持つてきな、こいつら完成させてやつからよ」

本当に物を作る時に楽しそうな顔をしますね。こういう人の方が僕は嫌いじゃないですけどね。

「ではその時にはお願いしますね」

「おうよ」

ははは、完成するのが本当に楽しみですね。さて、こちらも真面目に働きましようか。

シウルバルツバルト、ハイデルベルグの買収に動かなくてはいけませんね。

深夜、ケンプファルト家の別棟

マクシミリアンは書類の処理に追われていた……………

「マクシミリアン様、そろそろお休みになられたほうが」

「サクヤ……………僕は大丈夫です。先にサクヤが休んでいても構いませんよ。もうチエルは寝たんでしよう?」

「ええ、チエルシーは寝ましたけど……………あの子はまだ9歳ですから」

心配してくれるのはいいんですけど、少しでも明日の仕事を減らしておかないと工場に行けなくなりますからね。そうそう、チエルとチエルシーは、あの悪戯大好きっ子ですよ、僕にとんでもない物を飲ませようとして、鼻の中に入れた子ですよ……………

「サクヤ、先に寝ていなさい。夜更かしは老化を招きますよ」

「平気ですよ、私の中を流れる時間を遅くすれば防げますから．．．」

「能力の無駄遣いじゃないですか．．．．．」

「使ってこそ価値があるのでは？」

「そりゃそうだけど．．．．．」

ふう、まだまだ仕事はあるんですけどね。シュルバルツバルトから幻獣や亜人などの危険な生き物が領地にやって来ているみたいですし、あそこは領主がいなからしようがないと言えましょうがないんですが．．．中央は動く気配すらまったくありませんし。まあ幻獣は手なずけて騎獣にするのもいいですけど。取りあえずの対策をたてておかないと、僕が出るまでに被害が大きくなりそうですから。銃は各村に送ってありますけど、余計に怒らせることになり、病院に勤務している水のメイジでは、攻撃力が無いので追いつくことができないかどうかも怪しい。

今のところ直接的な人的被害はありませんが、畑の農作物を食べられた。家畜が食べられてしまった。などの被害が数件、幻獣などの目撃情報が多数入ってきています。被害を受けた方々には見舞金を出してはいるのですが、被害は食い止めなくてはなりません．．．．．はあ．．．うちの騎士団は領地の面積と、経済力にしては妙に数が少ないですし。まあ精鋭であることは認めますけどねえ。

パスツ、カサカサカサ．．．

「サ、サクヤ？ちよ．．．．．何やってるんですか」

時が止まり、サクヤがマクシミリアンの後ろに立ち、頭部を抱える。そこで、再び時は流れだす。

「ふえ．．．．．」

どういう状況なんですか？どういう状況なんですか？どういう状況なんですか？どういう状況なんですか？どういう状況なんですか？どういう状況なんですか？

どういふ状況なんですか？

「さ・・・サクヤ？」

頭の後ろに・・・サクヤの胸が・・・服脱いだみたいで直に・・・でも小さいから何とかって、僕は何を考えているんですか！

「マクシミリアン様？してもらえませんか？」

「・・・無理です、まず無理です・・・」

「サクヤ、自分が何を言っているのかを、もう一度よく考えなおしてください。あなたは今おかしなことを言っていますよ？」

「私は真面目ですよ。あなたに助けられたときから・・・」

「

え、何なんですか？どういふことなんですか？まったく理解できないんですけど・・・あーちよつと頭を冷やした方がよさそうですね・・・」

「サクヤ、ちよつと外に出て夜風にあたってください。戻ってくるまでに服を着てください」

マクシミリアンは、サクヤの方を向きもせずになんか言つと、ズボンのポケットに手をつ込みながら部屋から出ていこうとしたが、サクヤが再び時間を止め背後から近づくと、時間を再び流し始め、マクシミリアンに触れようとすると、

バシッ

マクシミリアンの肩に触れることなく、見えない壁に弾かれる。サ

クヤの顔に驚愕が広がる。

「サクヤ、これは十六夜式陰陽術『不戦結界』です。僕に陰陽術を教えたのはあなたですよ。そのことも忘れていましたか？」

サクヤは、マクシミリアンに触れることができないことが分かり諦めたのか、先に部屋から出て行った。

「ふう、駄目ですね、本当に頭を冷やしに行かなくては……………」

ちょっと落ち着きましようか？話し合いが必要みたいなので・・・（後書き）

最近だれもかまってくれなくていじけている五月雨です。

だれか、僕に声をかけてください・・・

はい、調子に乗りました。ごめんなさい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ぎんじまじょうじ・・・・・・・・

結論から言いましょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・終わった・・・・・・・・

さてさて、何で僕が今こんなに絶望しているのかという問題ほど簡単に解けてしまう問題はないでしょう。

答えは簡単です。朝起きたらベッドにサクヤと裸になって寝ていました。ベッドには紅いシミやらなんやらが・・・・・・・・昨日夜風に当たって部屋に戻ってきたら、落ちついたのかサクヤが服を着ていて、紅茶を出してくれたためにそれを飲んだところまでは記憶が・・・・・・・・あ・・・・・・・・r?

紅茶、紅茶が原因ですね。媚薬でも仕込んでいたとすれば・・・・・・・・まあその後が今現在の状況と・・・・・・・・どうしましょうか？ハルケギニアでは妾を持っている貴族はまあ、たくさんいそうですね。はあ、また悩みの種が増えましたね。そろそろ自分用の胃薬作っておきましょうか？

「はあ、サクヤ、起きてください。朝ですよ」
ちよつと声をかけてみるとサクヤはモゾモゾと動き、上体を起こす。

「あ、マクシミリアン様おはようございます。昨晚は・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・激しかったです」

顔を赤らめながら言われても……
……。薬のせいだと信じたいです。僕は今、ものすごくそう
思っています。

腰が痛いとか言って結局サクヤは今日は一日休むそうです。サボリ
では、ありませんよね？連続してちよつと大変な仕事が並んでいる
時ではあるんですけど、まあ書類仕事をある程度サクヤに任せて、
武器工場にやってきたマクシミアンです。あ、そう言えば書類の
中に、買収の件の仕事が混ざっていた気がしないでもないんですけ
ど……。まあサクヤなら僕が手出ししなくても完成させて
おいてくれますよね。

「マクシミアン様、お考えの通りやったら射程距離も威力も、命
中率も上がりました。それと我々の方でちよつと改造してみまして
一発一発弾込めをしなくても撃てるようになりました」

「そうですか……？」

「ダメでしたか？」

思っていた以上にとんでもない技術者ばかりです。そのための構
造はヒントをボソツと呟いただけなんですけど……。

「いえ、だいぶ大きな進歩です。その量を産をお願いします。それ
と、フネ用の大砲の製造もお願いします。設計図はすいませんが僕
が描かせていただきましたのですがよろしいでしょうか？」

「ええ、マクシミアン様に描いていただけるのは我々にとって、
新しい知識の学べる教材でありますので」

「建て前と本音が逆になっていますよ……。まあ別に
僕がかまいませんが」

僕の直属の人は変な人ばかりですね。変であつても優秀ですし、

ヤバいぐらい頭のネジが外れているわけじゃないところがせめてもの救いですが。今朝のサクヤはさすがにヤバかったですけど。

「おや、すいません」

「だから良いですって、僕のがままを通していただいているんですから……じゃあちよつと待つていていただけます？」

「ええ、いくらでも待ちますよ」

本当にありがたいですね。こういう風になんだかんだ言っても僕を助けてくれるような人がいることは。

「これを実行していただけますか？」

工場の設計担当のみなさんや、工場長と相談しながら新式の銃と、大砲の設計を完成させました。ここまで来るのに取りあえず30分くらいでしょうか？大砲の方は、設計図を複写して、造船所を持っていき、搭載できるかの確認を取って、可能であれば大砲の製造も開始してもらおう方向になりました。

「では造船所の方への確認はお願いします。それと、連携もご自由に取っていただいて構いません」

「分かりました。では完成したら連絡いたします」

さて、そっちの方は工場の方々に任せて、僕は職を一時失いかけてしまった職人さん達のところへ行かなくてはなりませんね。ちよつと大事なようがありますからね。

「で、私達に何の用なんですか……」

「うわあ、凄い怒っていますねえ。僕が工場を作ったせいで彼らの仕事を一時的に奪ってしまつたので、分からなくもないですけど。でも僕は仕事を依頼しに来たんですけど。まあ最初から計画があつたんですけどね。彼らのための……」

「申し訳ございません。しっかりと打ち込んでもらいたい仕事がありましたのですが？」

「……」

それでもやっぱり気になるんですね。

「うちの騎士団の銃を。設計は僕がさせてもらいますが、みなさんの手で作ってもらいたいです。あなた方の腕の良さは確実です。ですが、工場にある機械や、働いている人たちはまだ経験が少なすぎるために僕の父にも関係することを任せることはできません。ですからみなさんにやっていただきたかったですか？」

「われわれとて、食べないと生きてはいけません。しょうがないからその仕事を受ける」

「すみません。ありがとうございます」

さあ、これでまた一つ仕事は片付きましたよ。

次の仕事にかかりましょう。

.....やじじまじゅう.....

ちょっと自分にとって苦手な部分がありました。

冒頭とか.....

しつこい生き物は嫌われますよ・・・

サクヤはやはりとんでもない人物です。家に帰ったとたんに目に入ってきた情報。

シウルバルツバルト、ハイデルベルグ両地方の買収に成功。そのためメイド達が宴会をしているという情報でした。

「・・・サクヤ、チエル、ターシャ（本名はナターシャ）、アリア、リリア、昼間から宴会なんて何考えているんですか。それに平均年齢11じゃないですか！」

ちなみにサクヤが11、チエルが9、ターシャが12、アリアが12、リリアが11ですよ。

って、取りあえず事態を收拾しないと・・・

「マクシミリアン様」

っ、完璧に酔ってる。

「スリープクラウド」

予備の杖であるネックレスから眠りを誘う雲が湧き出て、宴会の真っ最中だった5人を眠らせる。

「はあ、まったく。真昼間から宴会だなんて。宴会だったら言えばいくらでも用意するんですけどね」

白ワインがおいしいじゃないですか。タルプからお酒は取り寄せますよ。度々ですけど・・・

「ただ、ここまで荒れると、さすがに、ねえ・・・」

割れたグラスやら、転がっているワインの樽、つまみにとでも持ってきたのであろう焼き鳥賊、そしてその他もろもろ。はあ、片付けるのが大変だ。

えーと、うちの騎士団は数が300。ちょっと他の同レベルの貴族と比べると少ないですね。月影のみなさんを合わせると1100ほど。そこに、僕の直属の空軍を合わせると1600。まあ、こういう風に累計で見れば多いのですが、月影のみなさんは遠いので、こちらにたどりつくまでに2、5カ月ぐらいかかるでしょうし、空軍はフネが完成していないので陸地での戦闘訓練を行っていますから、フネの上での戦闘訓練を、フネが完成したら新たにしなくてはなりません。

結局、すぐに使える戦力は300ほど。トリステインに隣接しているというのに兵力が異常に少ないですね。やはり兵力を増やした方がいいですね。買収して増えた領地のこともありますし………防衛上の問題、維持費の問題。さてさて、何かをやればやった分だけ仕事が増えますねえ。

シウルバルツバルトに直接足を運んでみたほうがよさそうですね。あそこには幻獣や亜人がいますからねえ。現時点シュトゥットガルト領内にいるメンバーでそれらと対抗できるのは父上と母上と僕、サクヤ程度ですから。サクヤは連れて行った方がいいですかねえ？書類仕事はターシャに任せれば、まあサクヤよりは遅いですけどかなりの速度で片付けてくれますし、空軍はアリシアとリリアに任せとおけばいいですし、チエルどうしましょう？アリシアとリリア抜けると空軍を指揮できる人がいなくなりますし、チエルシーを一人にするにはちょっと不安ですね。本当にどうしましょうか。

「リリア達に空軍に連れて行かせましょう」
こうすれば多分何とかなるはずですよ。

シウルバルツバルトにて……

「ピギーピギー」

白い豚のような顔をし、人の2倍はあるうかという大きさの生き物、オークが10匹余りの数で、二人の人間をかこっていた。

一人はハルケギニアでは珍しい黒い髪の少年、もう一人は白銀とでも表せばいいのであるう美しい髪を持っている少女である。少年の方は食べられ、少女の方はオークの母体になるだろうと、もしこれを見ていた者がいたなら、普通はそう思っただろう。

だが、この二人は普通ではなかった。

次の瞬間、少女の方がオークの一匹の首をナイフで刈り取り、さらに3体のオークの眉間めがけてナイフを1体につき1本投げた。すると、その投げられたナイフは眉間に吸い寄せられるかのように飛び、突き刺さり、対象から鼓動を奪った。

少年の方はポケットから水色の小さなボールをいくつか取り出し、残りのオークに向かってばら撒く。

「爆」

少年のそんな声と共に全てのボールが爆発し、白い豚の顔をした亜人を肉片へと変えた。

「ふう、サクヤしばらくはこれでよさそうですよ」

「そうですね……」

やはりとでも言うべきか、その二人はマクシミアンとサクヤだった。

「ここまでオークの数が多いとは思いませんでしたねえ」

思わず僕は口に出してしまう。いまさつき殺したオークを含めて既に50以上のオークを殺しています。幻獣や翼人もいるはずなのですが、オークと普通の生き物しか見当たらないんですよ。

「どうしますか？今日のところは引き返してまた来るといふことも

考える必要が出てきましたが」

そうですね、さすがにここまでオークとは遭遇するのに他の生き物と合わないのは問題がありますからね。オークの数を減らすことも必要ですがもともとの目的は、幻獣を味方にするのと、翼人と交渉を行うことですからね。目的を果たせる気配すらないのであればしようがないのですが、やはり結果なく帰るのはさすがにへこみま
すね。

「もう少し粘りましょう、どっちにしろオークの数を減らすことも後々のこととはいえ、最初から計画に含まれていたのですから」

「分かりました、・・・・・・・・と噂をすれば影のようですよ。マクシミリアン様」

「みたいですねえ・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕らの視線の先には白い醜い顔の生き物の群れがいた。

「本当にこの森、シユルバルツバルトには何十匹のオークがいるのやら、それとも100単位かも知れないですからねえ」

下手に他の人達にこの付近での仕事を頼めないとところが厄介なところ
です。他の人でもできる仕事であれば、その方達に任せて書類仕
事につきつきりになれるんですけど。実を言つと書類の仕事って本
来は僕や、父上、母上しかやってはいけないんですよ。僕はサクヤ
や、ターシャに任せることが多いんですけど・・・・・・・・それでも
最後にチェックはしているんですよ。流すような感じでざっとしか
見ていませんが・・・・・・・・

しつこい生き物は嫌われますよ・・・(後書き)

ここ最近連続して投稿できていて運がいいという感じですよ。

激戦必至

「幻獣がまったく出てこないじゃないですか」

「そうですねえ」

本当にオークしかいないんですかこの森は………
歩けばオーク、振り向けばオーク、休めばオーク、走ってもオーク、
燃やしたらオーク。

オークオークオークオークオークオークオーク、オークばっ
かじゃないですか。

「マクシミリアン様、気を確かに………」

「サクヤにだけは言われたくなかったセリフだよ。この前あんなこ
とをしておいて………」

そこで紅くなる必要があるんですか、まったく………

「強いようだな、人間よ」

「サクヤ、どうしたんです声を低くして………」

まったく、急に声を低くしたって普段のあなたを知っている僕には
まったく影響はないですよ。

「え、マクシミリアン様？今のはマクシミリアン様がおふざけにな
られたのでは？」

「そんなことするわけないでしょう………」

僕がそんなことするわけないじゃないですか？………ってあれ？
「………お主ら、ワシを普通に無視しているようだな」

僕とサクヤ以外に誰もいなかったはずですが。

思わず僕は顔を上げてしまった。その先に居たのは………

「「竜!?!」」

赤いうろこで、体長20メートルはあろうかと思われる大きな大きな
老竜。

「ふん、今頃気づきおったわい」

「「え、竜が喋ってる!?! 韻竜ですか?」」

確かに原作ではタバサの使い魔が風韻竜でしたけど、他に韻竜出てきた覚えありませんよ。それに普通に、隠すこともなく、喋ってますし………

「韻竜じゃ、ここらではワシを含めて10匹程度しかおらんがな」

「10匹も……」

凄い問題事項ですよ。韻竜って精霊魔法使えますし、まあ僕もカミユさんに習って少しなら使えますけど………かなりヤバい力を持った個体であることは分かりますよ。取りあえず………

「さて、お主らは相当強いようじゃな。1週間後にまたここに来い。その時に二人がかりで構わん。ワシに勝ったらこの森に住む幻獣全てにお主につくように働きかけてやろう」

「え？」

今、なんて言いましたか？とんでもなく大変なことだった気がするんですけど。

「お主らの様子を見ている限り、ワシらこの森にすむ幻獣の類に用があったのじゃろう。その用もだいたい見ていて分かった。戦力が欲しいということじゃろうからな。ワシもたまには骨のある相手と戦いたくてのお、じゃからもしワシに勝つことができればこの森に住む全ての者より強いということになるからみなも従うじゃろう。それを森のみなに通達してやると言っているのじゃ」

なんか勝てればとても利がありそうですが、負けてしまった場合はこの森にすむ全ての幻獣達からなめられてしまう可能性もあるということですね。いざとなったら眼帯はずせば何とかなるでしょうし……

「分かりました。その話受けさせていただきます」

「ま、マクシミリアン様！？無茶です。韻竜と戦うなんて」

焦ってますね。まあ普通ならそうでしょう。韻竜と戦えるような人なんて烈風のカルインぐらいの猛者でしょうからねえ。

「サクヤ、あなたは参戦しないで結構ですよ。僕一人でやりますか

ら

「余計に無茶です！」

ははははは、ここまで否定されるとさすがにへこみますねえ。

「大丈夫ですよ、サクヤ。問題はありません。負けたって生きて帰っては来ますから。僕が死ぬところが想像できますか？」

「……マクシミリアン様が力を抑えていることは知っていますが、下手をすれば死んでしまうのですよ」

あれ、何で知っているんでしょうね。僕、サクヤには眼帯の話をした覚えはありませんが。というか父上と母上、そしてカミーユさんとビダーシャルさん以外は知らないはずなんですけどね。誰かがしゃべってしまっただけでしょうか？

「ふん、面白そうな話じゃの。では1週間後にここで会おう。安心せい。すぐにここか、と分かるように会場は作っておいてやろう」
随分と太っ腹ですね。会場なんて無くても戦うのには問題ないでしょうに。まして、僕が迷子になって、試合の場所まで行くことすらできなかった、と森のみなさんに言った方が僕のダメージは大きくなるはずですが……

「ワシは戦いたいのが一番の目的じゃからな」

バトルジャンキーですか……

「では1週間後にここで」

さて、1週間どころか僕が強くなれるでしょうか？

激戦必至（後書き）

しばらく漢字4字でサブタイトルを付けられるかの挑戦をしてみたいと思います。
イエイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1831u/>

武器と魔法と技術と知識は使いよう

2011年10月27日23時07分発行